

平成29年度

てだこ市民大学

第8期卒業生研究発表会

てだこの都市の「夢・まち・人」づくりにあなたの力を！

市民大学の理念・目的

「てだこ市民大学」は、本市の「夢・まち・人」づくりの一環として市民の学習ニーズの高度化・多様化への対応と学ぶ喜びの促進、自己実現への支援を行うとともに、そこでの学習成果を地域社会や学校教育等に還元し、本市のまちづくりに寄与できる有為な人材を育成することを目的とする。



日時：平成30年2月24日(土)午後2時30分～4時30分

場所：浦添市中央公民館3階ホール

主催：浦添市てだこ市民大学



8期生卒業研究発表会

日時：平成30年2月24日（土）

14：30～16：30

場所：浦添市立中央公民館 3階 大ホール

司会：宮里 優花（市民大学事務局）

会 次 第

- | | | |
|------------|--------------------|--------|
| 1. 開会のあいさつ | 副学長（教育長） | 嵩元 盛兼 |
| 2. 学長あいさつ | 学長（市長） | 松本 哲治 |
| 3. 卒業研究発表 | | 第8期学生 |
| 4. 学部講評 | コミュニティ・ビジネス地域振興学部長 | 平良 美恵 |
| | 文化振興・教養学部長 | 比嘉 悦子 |
| | 健康福祉・スポーツ振興学部長 | 上地 武昭 |
| 5. 閉会のあいさつ | 事務局次長 | 石坂 ひとみ |

～ 目 次 ～

1、コミュニティビジネス・地域振興学部

テーマ一覧	1
・「てだこ市民大学」の顧客を増やす！	2～14

2、健康福祉・スポーツ振興学部

テーマ一覧	15
・レッツ・トライ・ゲートボール ～全世代 交流で人に優しい住みよい地域社会～	16～30
・死を考えることで今を輝いて生きる	31
・地域福祉実現のための自治会加入率向上	32～36
・ビューティータッチセラピーで 介護予防・認知症予防・健康長寿の延伸	37～44

3、文化振興・教養学部

テーマ一覧	45
・前田高地5月25日～5月6日の12日間の 激戦による、その当時の浦添住民の状況を 次世代の子供達へ伝えるために	46～83



平成29年度

コミュニティビジネス・地域振興学部 テーマ一覧

氏名	研究テーマ
川満 裕子 高良 克美 宮城 惇	「てだこ市民大学」の顧客を増やす！





卒業研究

学部名: コミュニティビジネス・地域振興学部

氏 名: 宮城 惇・高良 克美・川満裕子

1. テーマ

「てだこ市民大学」の顧客を増やす！

2. テーマ設定理由

地域を豊かで元気にするコミュニティビジネスを、積極的に創っていくための学びをやってきたなかで、「てだこ市民大学」の学生減少の現状は大変厳しく、このままでは市民の自己実現の応援と地域のきずなを繋ぐ活動ができなくなってしまうのではと危機感を感じ、今回のテーマとなった。

また、今回は、ビジネスの視点から、「てだこ市民大学」を1つの商品ととらえ、改めて「てだこ市民大学」をすばらしい商品として広く知ってもらえる機会にしたい。

3. 項立て

- 1 はじめに
「てだこ市民大学」の現状について
- 2 テーマを研究するために、今年度、取り組んだこと
 - (1) 南城市「市民大学」の視察（商品の検討）
 - (2) 卒業生を交えてのワークショップ（顧客の意見）
 - (3) アンケートの作成、インタビュー（宣伝活動の再検討）
- 3 テーマの研究から見えてきたこと
- 4 私たちが考えた顧客を増やす魅力的な「市民大学」
- 5 まとめ

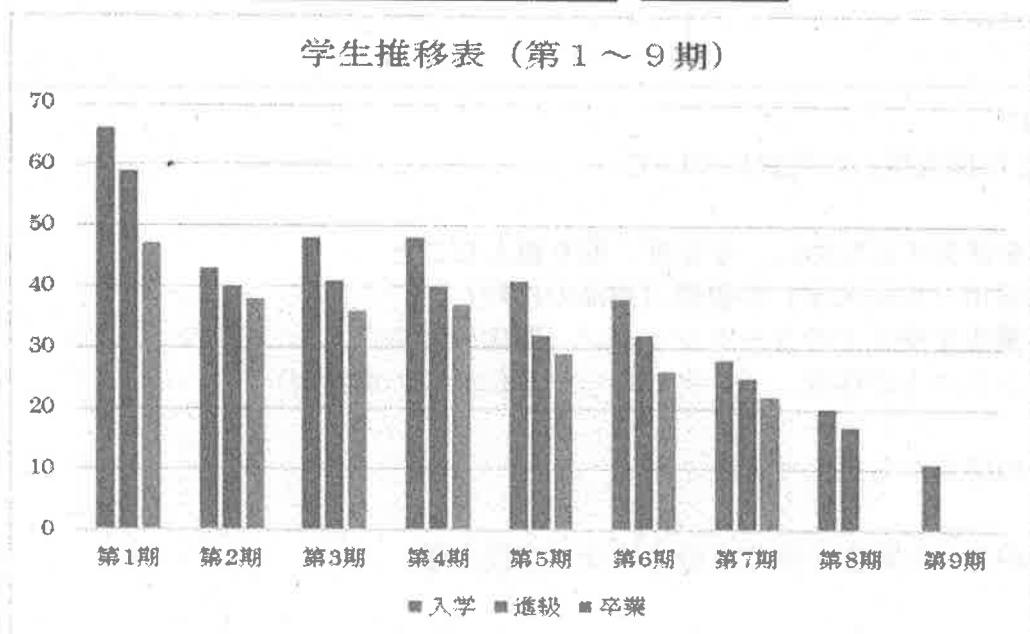
1 はじめに

「てだこ市民大学」の学生減少の現状は大変厳しい(※図1)。ビジネスの視点から、「てだこ市民大学」を1つの商品ととらえ、商品に人気・魅力がない理由は？商品を手にとった顧客の反応は？商品の伝え方は？などの視点から、「てだこ市民大学」という商品を研究した。私たちが素晴らしい！と思って購入（年間2万円）した「てだこ市民大学」が、どうしてこんなにも購入者が減ってしまったのか、研究から見えてきた事を参考に次へつなげたい。

(※図1)

市民大学学生推移表

	入学	進級	卒業	卒業率
第1期	66	59	47	71.2%
第2期	43	40	38	88.4%
第3期	48	41	36	75.0%
第4期	48	40	37	77.1%
第5期	41	32	29	70.7%
第6期	38	32	26	68.4%
第7期	28	25	22	78.6%
第8期	20	17		0.0%
第9期	11			0.0%
合計	343	286	235	68.5%



2 テーマを研究するために、今年度、取り組んだこと

- (1) 南城市「市民大学」視察（商品の比較検討）
- (2) 卒業生を交えてワークショップ（顧客の意見）
- (3) アンケートの作成、インタビュー（宣伝活動の再検討）

(1) 南城市「市民大学」視察（商品の比較検討）

日 時 : 8月24日（木）17:00～

参加者 : 浦添市「てだこ市民大学」事務局 4名

コミュニティービジネス・地域振興学部 学生 3名

同じ「市民大学」という商品を扱う南城市との比較から
何か課題が見えてくるのではないかと思います視察に行くことにした。

主に、ア)「市民大学」の運営について

イ) 学習（講座）内容について

ウ) 組織について



ア)「市民大学」の運営について

- ・“なんじょう地域デザインセンター”による、自主運営となっている。
“なんじょう地域デザインセンター”とは、(※資料1)
2012年4月に誕生。南城市と協働で設立された市民により運営されている任意団体。通称「なんせん」。
現在のセンター長は2代目の方で、2011年に他県より沖縄へ移住。
「なんせん」は、南城市の「市民大学」学生や卒業生のみなさんと、南城市の課題解決への動き、ワクワクする仕掛けをつくって活動をしている。

イ) 学習(講座)について(商品の中身) ※資料2

- ・地域資源(人)を活かしている。
地域で活躍している方の講師や地域発祥の特産品をテーマの講座では、産業、観光、地域愛などが学べる。
- ・講座(商品の中身)を自由に設計できる。
講座の企画に、学生(現役・卒業生)が関わっている。
講座の時間内にフリートークの時間がある。
学びの実践の場をして、「市民大学」を活用し、満足度が高い。

ウ) 組織について ※資料3

- ・学生の人数が、1学年1学部30名になっている。
→互いに声を掛け合い、仲間作りがしやすい。
- ・卒業後は、南城市に人材登録をして、得意分野への活動参加の機会を得ている。

(2) 卒業生を交えてのワークショップ

日 時：11月18日（土）14:00～16:00

場 所：中央公民館分館にて

参加者：6・7期卒業生を中心に呼びかける。

当日は12名の参加。

「てだこ市民大学」の顧客を増やそう！のテーマで、卒業生から見た、現在の課題を提供していただいた。

参加者からは、卒業しないと分からない「てだこ市民大学」の魅力や素朴な疑問など、活発な発言があった。



【参加者の声】

- ・卒論を提出するということに負担を感じ、入学を躊躇してしまう。
- ・「てだこ市民大学」と「てだこ学園大学院」の名前が似ていて高齢者の学びと混乱しやすい。
- ・授業料（2万円）は、若い人（高校生・大学生・子育て中の方）の受講希望者に負担になっていないか？
- ・顧客（学生）をもっと大切にしてほしい。商品売りっぱなしにしていないか？
- ・卒論が大きなハードルになったが、無事やりとげ、達成感を味わった。
- ・商品を購入（入学）した事を家族が見ている。満足度は、個人だけのものではない。人が人を呼ぶので顧客の満足度は最優先！
- ・再購入者（別学部への入学）は、特典があってもよいのではないか。

今回の参加者は、私たちが見えない「てだこ市民大学」の商品の価値を教えてくれる、とても優良で有難い顧客と言える。これからも大切につながっていくことで、ますます商品が魅力的になり、自信をもって「てだこ市民大学」を伝えていけることを知ることができた貴重な時間になった。

(3) アンケートの作成、インタビュー（宣伝活動の検討）

◆ 10月17日（火）

“働き方改革セミナー”にて

（主催：株式会社クラウドワークス、浦添市）

参加者の中から約100名へのアンケート。

回答79名中 49名が、「てだこ市民大学」を知らないとの回答がある。

◆ 11月3日（土）

“まなびフェスタ”の会場にて

103名へのインタビュー

回答103名中 56名が知らないとの回答。

“知らない”の回答の中から、興味がある、資料がほしい

などの声も聞こえたことから、まだ潜在的なニーズがあるようだ。

在校生、卒業生の「でだこ市民大学」購入のきっかけは、購入者からの紹介、チラシ、ポスターなど様々。いろいろな形での宣伝活動は、これからも重要になるだろう。

3 テーマの研究から見てきたこと

(1) の取り組みからは、

NPO による運営や、学生による自主企画講座で、商品の中身を充実させる。

特に、自主企画の講座は、今年度私たちも体験しているので、「てだこ市民大学」の商品の魅力を高めてくれると実感した。

(2) の取り組みからは、

優良な顧客の口コミや、顧客自身が商品の価値を高めてくれることを知った。

同窓会を立ち上げ、商品のアフターフォローを深めたい。

(3) の取り組みからは、

宣伝活動の充実から、SNS の活用や、CM の作成などの企画を計画した。

アンケートやインタビューを行うことが、宣伝活動にも繋がる！ということを経験することができた。

4 私たちが考えた、顧客を増やす魅力的な「市民大学」

◇混乱しやすいネーミングについて

《宮城 案》“てだこ市民大学 ” 混乱なんか気にしない。

《高良 案》“Citizen College (シティズン カレッジ)” まったく別ネーミング

《川満 案》“てだこ市民大学アクティブ” ちょっと変化

《その他案》 広く市民からの公募。公募することで宣伝活動にも繋がる。

◇「てだこ市民大学」同窓会

約 260 名もの卒業生がいる。優良な顧客でもある方たちのアフターフォローができ、この人材が地域資源となる。

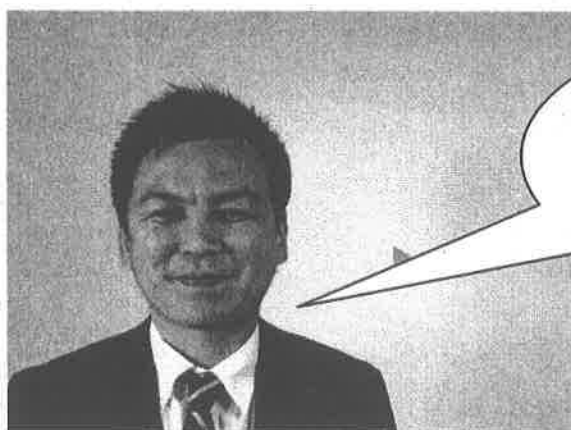
年間数回の集いの場をつくり、商品の品質向上につなげる。

◇まだまだ宣伝不足を感じるので、宣伝の種類を拡大したい。

私たちが作ったCM！

(動画) ♪♪♪ ～ 15秒ほど

※動画製作協力：1年次（9期生）長谷川まさし



世代を超えた
意見交換ができて、
とても
楽しかったです。

“浦添” が
もっと
好きになりました。



5 まとめ

商品としての「てだこ市民大学」を満足してもらうためには、直接参加できる仕組みにしたほうが良い。行政主導ではない、みんなで、“創造できる「市民大学」”のイメージがひろがり、新規顧客が関心を寄せるのではないか。

また、学びの意識が高い顧客を確保しておくためには、卒業生約200名が繋がる同窓会がほしい。なぜならば、この顧客は「てだこ市民大学」にとって、優良な顧客であり、魅力的である。同窓会があれば、次の「てだこ市民大学」購入者が、私たち3名の様に、商品に満足できるよう、サポーターになって関われるようなネットワークに繋がる仕組みとして活用出来るだろう。顧客が顧客を生み、課題解決につながるのではないか。

「てだこ市民大学」で、たくさんの学びの機会をつくっていただきありがとうございました。

素晴らしいスタッフ・講師の皆さま、そしてここで出会った仲間に、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



回	日程	講座内容	場所
1	6/17 (土) 13:30~18:30	開校式／市長講話／交流会 ○講師：学長 古謝景春	玉城庁舎 2 階ホール
2	7/6 (木) 19:30~21:00	市民協働のまちづくりについて学ぶ／互いを知る ○講師：まちづくり推進課、なんじょう地域デザインセンター	"
3	7/15 (土) 9:00~15:00	地域の商工業を知る（事業者訪問） ○講師：運天貴也氏（南城市商工会理事・市民大学 1 期生）	市内(バス)
4	8/3 (木) 19:00~21:30	多くの意見のまとめ方を学ぶ／よりよい会議の進め方 ○講師：宮道喜一氏（特定非営利活動法人まちなか研究所わくわく）	玉城庁舎 2 階ホール
5	8/24 (木) 19:30~21:00	産業について学び課題を考え整理する(漁業・農業) ○講師：知念漁業協同組合、南城市内農家等	玉城庁舎 2 階ホール
6	9/7 (木) 19:30~21:00	自治会について学び課題を考え整理する ○講師：新城辰夫氏(つきしろ自治会)	つきしろ 公民館
7	9/21 (木) 19:30~21:00	市民大学生の活動について考える(チームビルディング) ○ファシリテーター：宮道喜一氏（NPO 法人まちなか研究所わくわく）	玉城庁舎 2 階ホール
op	10/4 (水) 18:30~21:00	南城市の伝統芸能を見に行こう（7、8 期生合同） ○調整中	南城市内
8	10/12 (木) 19:30~21:00	活動の具体化 1 / OBOG の事例紹介 ○ファシリテーター：宮道喜一氏（NPO 法人まちなか研究所わくわく）	玉城庁舎 2 階ホール
	10/26(木)	※予備日(災害・講師の都合などにより、予備日を 1 回設定する)	
9	11/2 (木) 19:30~21:00	活動の具体化 2 ○ファシリテーター：宮道喜一氏（NPO 法人まちなか研究所わくわく）	調整中
10	11/16 (木) 19:30~21:00	企画を固める/役割を決める ○ファシリテーター：宮道喜一氏（NPO 法人まちなか研究所わくわく）	調整中
11	12/7 (木) 19:30~21:00	自主イベントやワークショップを開催する企画を立てる ○8 期生主体	玉城庁舎 会議室
12	12/21 (木) 19:30~21:00	役に立つ「届く」ための情報発信とチラシづくり ○講師：金城良治氏（株式会社ストリズム・市民大学 1 期生）	"
13	8 期生により 実施日を決定	自主企画イベント(ワークショップ)実施・親睦会 ※開催場所は、8 期生により決定	未定
14	2/8 (木) 19:30~21:00	自主企画イベントの振り返り/1 年次の振り返りと今後に向けて ○ファシリテーター：なんじょう地域デザインセンター	調整中
補講	2 月中	これまでの講座の振り返り／各自の近況報告	
15	3/7 (水) 19:00~21:30	修了式／懇親会 ○学長より終了証の授与／講師・卒業生との交流	玉城庁舎 2 階ホール

項 目	内 容
入学対象	18 歳以上の方を対象とします。 ※本市のまちづくりに関心がある方で、市内在住・在勤者を優先します。
※ 定員	受講生 30 名以内 ※入稿願書に基づき、応募の動機が市民大学の趣旨に沿ったものであるか、書類審査を行い決定します。
場所	南城市玉城庁舎 2F ホール、会議室、南城市内公民館など ※但し、講座内容や状況により場所を随時変更することがあります。
期間	1 年次／平成 29 年 6 月 17 日（土）～平成 30 年 3 月 7 日（水） 2 年次／平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月
開校式	日程／平成 29 年 6 月 17 日（土） 13 時 30 分～ 場所／南城市玉城庁舎 2 階ホール ※当日は、オリエンテーションと市長講話、交流会も予定しています。
講座日程	平成 29 年度 なんじょう♥市民大学 1 年次講座一覧（裏面参照） ※講座の日程・内容・会場については、変更となる場合がありますのでご了承下さい。
時間	基本的に 平日 19 時 30 分～21 時（90 分間） ※但し、講座内容によっては時間を随時変更することがあります。
受講料	各授業科目の授業料は、原則として無料です。 ※但し、テキスト代や視察等で実費を負担していただくことがあります。
申 込	【締め切り】 平成 29 年 5 月 31 日（水）まで 入校願書を持参・郵送もしくは E-mail（PDF 版）、FAX でお申し込み下さい。 ※入校願書のデータがほしい方は、下記の問い合わせまでご連絡ください。 【募集要項・入校願書設置先】 なんじょう地域デザインセンター、南城市各庁舎、支所、図書館、 中央公民館、イオンタウン南城大里、シュガーホール、南城市公式 HP 等 【問い合わせ・送付先】 なんじょう地域デザインセンター（なんじょう♥市民大学事務局） 〒901-0695 南城市玉城字富里 143 （玉城庁舎の玄関に向かって左に設置させているプレハブ） Tel / Fax : 098-949-7530 E-mail : info@nancen.jp ※スタッフ不在時は南城市役所まちづくり推進課にお預けください。

平成29年度

健康福祉・スポーツ振興学部 テーマ一覧

氏 名	研 究 テーマ
金城 幸弘	レッツ・トライ・ゲートボール ～全世代交流で人に優しい住みよい地域社会へ～
西 啓亨	死を考えることで今を輝いて生きる
与那原 孝	地域福祉実現のための自治会加入率向上
仲西 郁代	ビューティータッチセラピーで 介護予防・認知症予防・健康長寿の延伸





卒業研究

学部名：健康福祉スポーツ振興学部

氏名：金城幸弘

1. テーマ

レッツ・トライ・ゲートボール

“ 全世代交流で人に優しい住みよい地域社会へ ”

2. テーマ設定理由

ゲートボールは、年寄りのレクリエーションと思っていました。が実際にやってみると戦略を要する頭脳プレーであり、競技スポーツです。エキサイトするのも無理はなく虜になってしまった。その楽しさや魅力を伝え競技人口を増やすため、効能を研究した。

3. 項立て（概要でも良い）

ゲートボールとは、どんなスポーツ？

ゲートボールの歴史 と ゲーム内容

特 性 と 健康への効果

なぜ？ゲートボール人口は減ったのか

普及促進を図るための取り組み

浦添市ゲートボール連合の活動、練習場、大会実施企業

リーダー輩出・育成の効能、地域に広める為の活動

まとめ 「人に優しい住みよい地域づくりをめざして」

レッツ・トライ・ゲートボール

“全世代交流で人にやさしい住みよい地域社会へ”



競技 動画 (1:05)

第6回世界のウチナーンチュ大会
平成28年10月28日(金)
奥武山陸上競技場
決勝 アルゼンチン対アメリカ
海外13チーム
県内23チーム

ゲートボールとは、どんなスポーツ？

ゲートボールはスティックでボールを打ち、コート内の3つのゲートを通過させ、最後にコート中央のゴールボールに当てるまでの合計得点を競うスポーツです。

性別や体力の差にとらわれず、子どもからお年寄りまで、全世代がゲームを通して楽しく交流できるスポーツです。 (4世代の選手が一緒にプレーできる)

ゲートボールの歴史

昭和22年北海道の鈴木栄治さんが、子どもたちのために考案された日本生まれのスポーツである。身体的負担が少なく、高齢者の望ましい健康体力づくり、生きがい対策として評価され急速に全国に広まった。いまでは、世界50カ国以上の国や地域で1000万人が楽しむスポーツへと成長した。

沖縄県では、昭和50年に現理事長大城哲夫氏が導入し各大会を開催、昭和55年に沖縄県ゲートボール協会が誕生。昭和61年に沖縄県ゲートボール連合として発足し業務開始となる。

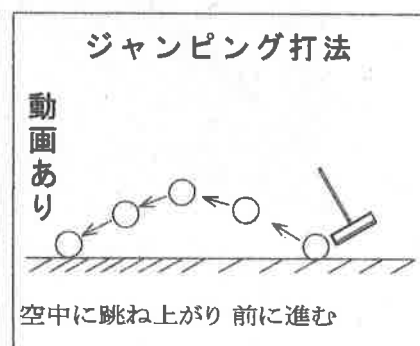
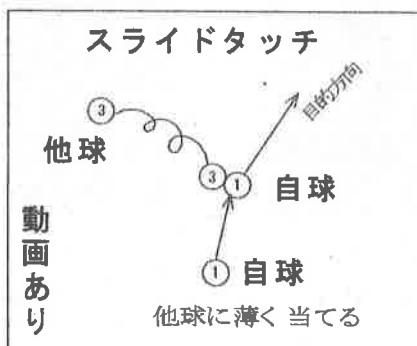
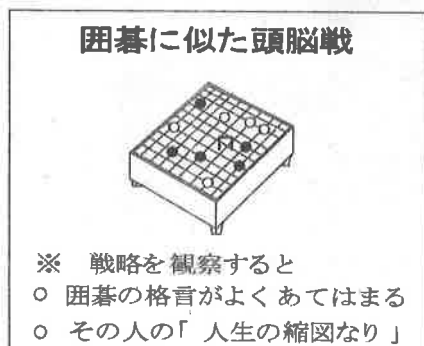
ゲーム内容

5人対5人のチーム対抗形式のゲームで、競技時間30分の総得点で勝敗を決する。

先攻、後攻と交互にチームの打撃順番どおりに自分のボールを打撃していき、3つのゲートを通過させ、ゴールボールに当てて「上がり」を目指す。

特 性

- 囲碁や将棋の様な戦略を要し、相手チームとの多様な作戦の駆け引きや、心理戦の面白さもある頭脳ゲームです。トップレベルになるとスライドやジャンピングなど、ビリヤードにも似た高度な打撃技術も披露され、観ても楽しめるスポーツである。



- 特別の体力・運動能力を必要とせずに運動量が少なく安全である。又、激しく動き回る事なく、身体接触も全くない老若男女誰でも出来る大衆スポーツである。

※ 1 回戦の運動量を簡易歩数計で測って見ました。

1 ゲーム30分で 60代～80代の方を数回	500歩～900歩
浦添市野球場の外回り 7～8分で一周	550歩程度
2 回続けてプレイした場合(1時間)	1779歩だった

- 競技開始時に5人そろっていれば、欠員が生じてそのまま競技を続行する事が出来る。又公式戦でないときは、普段着でも気軽にプレイ出来るスポーツである。



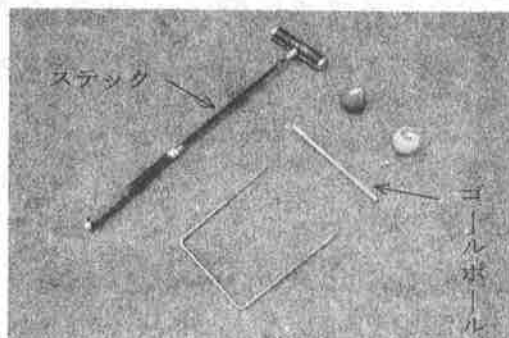
競技开始前 5対5



仲間自治会と前田自治会交流

- 比較的簡単な施設・用具でできる。コート一面の広さは17m×22mに若干の余裕があればよい。遊休地等の広場にコートを作って楽しむことができる。

※ タッチとスパーク打撃をマスターすると初心者でもすぐにプレーができる。



必要な道具



スパーク打撃
自球で他球をはじく

※ タッチとは自球を打撃し他球に当てる事を言う

医学調査で証明された健康への効果 (2つの医学調査)

脳の活性化にどのような影響を与えるか70歳以上男女を対象に検査した。

- ① ゲートボール愛好者は、記憶力や思考力は良好で脳血流量も上昇しており脳の活性化が証明された。

ゲートボールの性質から考えるとチームプレーである事、お互いに会話しながら行う点、又競争的要素が大いにある点が脳活動の維持に貢献しているようです。

- ② ゲートボール愛好者を対象に、「開眼片足起立時間」を測定した結果平均年齢よりも長時間立っている事が可能と、証明された。

スパーク打撃など片足立ちの運動は、バランス感覚や俊敏性、筋力の増強に効果があると考えられ、転倒・骨折の予防となる

なぜ？ゲートボール人口は減ったのか

ゲートボール人口が減少しているのは、全国的なことで沖縄県も同様である。

沖縄県ゲートボール連合の会員登録人数の推移をみると、10年前の5割強に激減。

我が前田チームにおいても3～4年ほど前から、メンバーの離脱や新規入会者もなく

1チームを構成するのがやっとの事である。その原因を探るべく識者の論調やネット情報から、近年の高齢者の動向として、コミュニケーション能力の低下、個人主義と共に人付き合いが苦手になり、チームプレーは煩わしい、人に指示されたくない、さらに、ゲートボールにおいてはルールが難しい等様々なとらえ方がある。

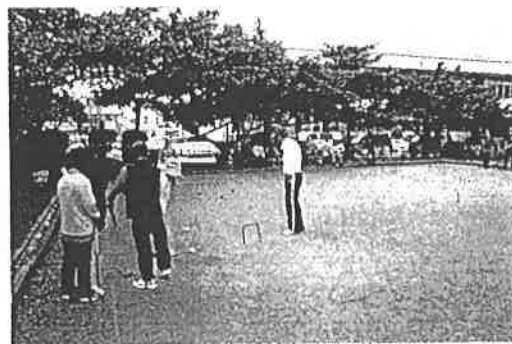
普及促進を図るための取り組み

ゲートボール人口が減少傾向にある為、日本ゲートボール連合の指導教本では、これまでの「老人のスポーツ」というイメージの是正を図り、初心者教室を幅広く開催すると共に世代間の交流やファミリースポーツとして奨励し、障がい者の参加にも配慮して、生涯にわたって親しまれることを目指して普及振興を進めている。



サンアビリティズ体育館

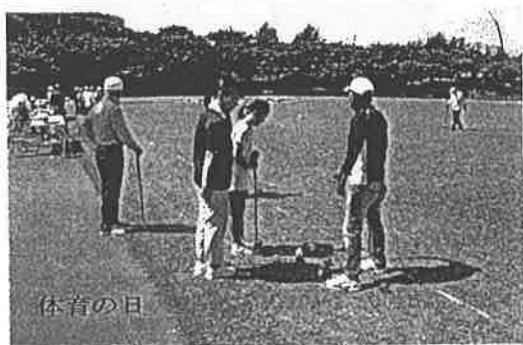
※ 特殊球と1部特別ルールで行うが基本的には同じ



サンアビリティズゲートボール場

※ 通常の道具と基本ルールで行う

浦添市身体障がい者ゲートボール大会



体育の日

「いきいきスポーツレクリエーションまつり」

平成29年10月9日(月) 浦添市運動公園

※ 初心者教室も開いた



全九州ろうあ者スポーツ大会

第36回ゲートボール競技

平成29年5月14日(日) 浦添市多目的運動場

- ◎ 沖縄県ゲートボール連合でもゲートボールの普及促進を掲げて、様々な方策を実施しているが、平成29年12月には、指導者スキルを学び学校、地域スポーツクラブ活動等の普及場所の開拓を図るべく、公認スポーツ指導者(ゲートボール)養成講座を開催した(19名受講) 早朝から3日間弁当付きで拘束状態の受講だった。平成30年後半には公認スポーツ指導者有資格者20名余が各地域に誕生する。

※ 受講様子を次に示す。

公認スポーツ指導者(ゲートボール)養成講座

於: 沖縄県体育協スポーツ会館・那覇市わかばOBコート



基礎理論を学ぶ

ゲートボールと生涯スポーツ
特性と歴史
技術の構造
指導者の役割



基礎理論と指導実習

基本技術の個人指導

ボールの位置及びスタンスの取り方
スティックの握り方の初心者指導は統一する。



基礎理論を学ぶ

体力トレーニング
コンディショニング
競技の運営及び管理法



現場における救急処置の実習

反応がなく 普段の呼吸でない場合直ちに
心肺蘇生を行う。疑わしきは蘇生を行う。
深さ 5 cm・圧迫 30 回+人工呼吸 2 回
強く・早く・絶え間なく繰り返し

日赤沖縄支部指導



ゲートボールの技術評価 実技試験
10 m 先の円の中に止める



ゲートボールの実技試験
3 m、6 m 先のボールにタッチ

浦添市ゲートボール連合の活動

浦添市ゲートボール連合の組織構成は、行政区ごとに支部制をとっている。

現在は、8支部まで激減したが、応援要員をやり繰りして会員総参加の5つの大会を開催して、地域会員相互の親睦、交流を図っている。

県大会や中部地区大会等は、個人でもチーム編成して参加している。

浦添市ゲートボール連合加盟費		H 29.4.1 現在	
登録料	(県登録料含む)	1人	2500円
浦添市内の加盟団体数会員登録数		8団体	・ ・ 59人

平成29年4月22日	若夏ゲートボール大会	中央ゲートボール場
7月16日	夏季ゲートボール大会	〃
9月23日	自治会対抗ゲートボール大会	〃
平成30年1月13日	新春ゲートボール大会	〃
3月3日	春季ゲートボール大会	〃



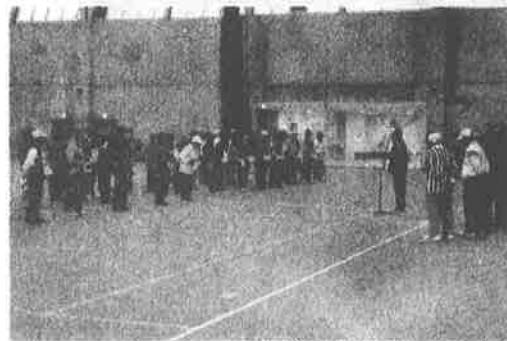
自治会対抗ゲートボール大会
平成29年9月23日(土)



新春ゲートボール大会
平成30年1月13日(土)



平成28年1月12日(火)



平成28年1月13日(水)
浦添市多目的運動場

浦添市・蒲郡市新春ゲートボール親善大会

浦添市ゲート ボール連合のその他の大会参加事業

中部地区連絡協議会ゲート ボール大会

中部地区審判員連盟ゲート ボール大会

中部地区老人連絡協議会ゲート ボール大会

JA年金友の会ゲート ボール大会

コザ信用金庫杯CB選手権大会

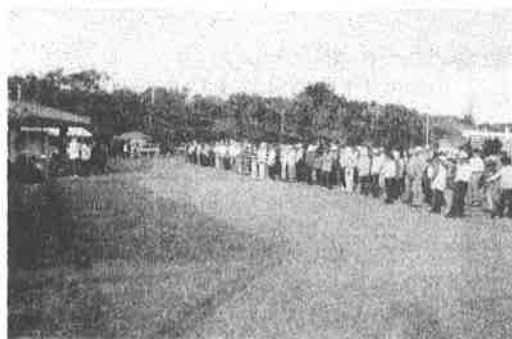
おきでん対話旬間ゲート ボール大会

沖縄県ゲート ボール連合主催大会 沖縄県ゲート ボール連合事業計画は巻末に添付

日本ゲート ボール連合加盟団体人数

	平成10年	15年	20年	24年	平成28年 3/31
全国 (47)	502060	363477	228161	146009	106646人
沖縄	5731	4626	2732	1769	1453人

沖縄県の審判員登録人数 664人



県民体育大会

具志川ゲート ボール場 うるま市具志川

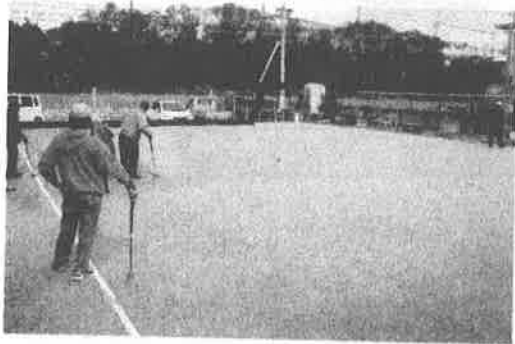


県民体育大会 浦添市選手団

浦添市内のゲート ボール場

- 浦添市内で練習しているゲート ボール場を紹介します。以前、各集落で相当数の愛好者が試合形式で練習に講じていましたが、現在は市ゲートボール連合加盟団体の主な練習は下記の5ヶ所で行われています。いつでも気軽に参加できて、教えてもらえます。

(コート一面の広さは17m×22mに若干の余裕があれば良い。)



緑ヶ丘ゲート ボール場

伊祖3丁目12 浦添商業グラウンド 横
練習は毎週 火・木・土 10:00～12:00
伊祖の方々とベテラン勢が使用



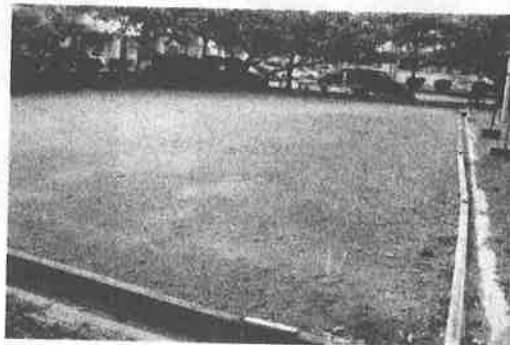
勢理客ゲート ボール場

勢理客3丁目 ありあけ保育園向かい
練習日は毎週不定期 10:00～12:00
勢理客近辺在住の人が使用



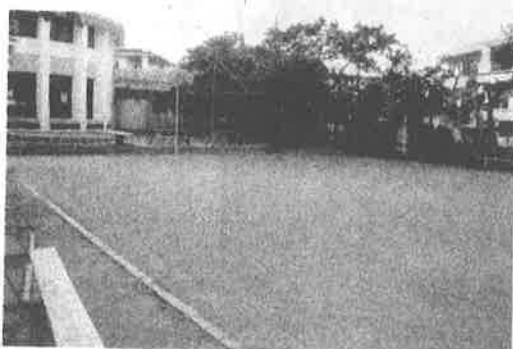
仲間自治会ゲート ボール場

仲間在 浦添中学校近く
練習は毎週 火・木・土 13:30～16:30
自治会員の皆様の情報交換の場となり、
少しのぬかるみは整備して楽しんでいる



サンアビリティーズゲート ボール場

宮城4丁目11
練習日は毎週不定期 宮城近辺在住の人が使用
毎年、市身体障害者ゲートボール大会を開催
健常者は、施設利用料1日100円でます



前田自治会ゲート ボール場

前田在
練習は毎週 火・木・土 13:00～16:00
地域住民の皆様の情報交換の場となっている
昨年から休みがちなので奮起が望まれる

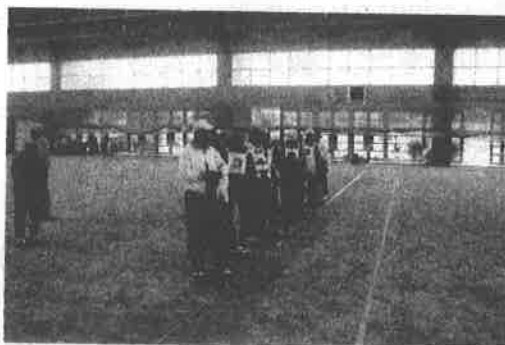


中央ゲート ボール場 大平在

陽明高校北側近く

浦添市の5つの大会はこのコートで行う

企業主催によるゲートボール大会



伊祖自治会チーム

第16回JA年金友の会ゲートボール大会

JA年金友の会ゲートボール大会が平成29年12月1日（金）に沖縄県総合運動公園レクドームで開催された。全島地区予選を勝ち抜いてきた、年金友の会会員チームで構成されている代表だ。当日、高速道路で事故の為朝の出勤時間と重なり大渋滞が発生、開会式開始時刻が遅れたが45チームが熱戦を繰り広げた。



浦添浦友会チーム

おきでん対話旬間ゲートボール大会

平成29年11月18日（土）に沖縄市かりゆし園にておきでん対話旬間ゲートボール大会が開催された。「地域に密着した企業」・「地域に貢献する企業」を目的として、職員もチーム編成して参加した。



仲間楽生会チーム

コザ信用金庫杯ゲートボール選手権大会

平成29年12月9日（土）に第34回コザ信用金庫杯ゲートボール選手権大会が沖縄県総合運動公園レクドームで開催された。浦添からは3チームが参加した。コザ信用金庫との交流を目的に職員もチーム編成して参加した。

リーダー輩出・育成としての効能

近年、地域のリーダーのなり手がなく、現リーダーのため息も聞きますが、地域老人クラブに至っても、会長不在で解散や休会の状態が各地域で起こっています。数年来、老人会との行動を共にしながらゲートボールを始めて日は浅いが振り返ってみると、地域活動の主役は老人会であり主な役割もゲートボール愛好者が担っておりました。

ゲートボール競技は、リーダーの的確な指示と個々の技量、チームワークが勝敗を決します。一人一人の戦術も異なり感情移入が激しい方達がいる中、冷静な対応をして人間関係を壊さない心がけを醸成し、自身の感情をコントロールする精神力を養う場でもあります。

囲碁や将棋の様な戦略を要するこの競技は、子ども達においても成功体験を積み重ねる教育現場となり、情緒安定の一助になると思います。

早稲田大学大学院の谷口真美教授のネット配信から「リーダーの在り方は多様でいい」と認識すると自分なりのリーダーシップを考えられるようになる。多様性を生かす力はトライ&エラーを重ねる中でついていくと話されています。ゲートボールは、全世代交流が出来て初心者やベテランのハンディも全く必要なく、トライ&エラーの繰り返しです。以上のような観点からゲートボールは、自然なかたちで多様性の力が備わり、リーダーを育成し輩出に繋がるものと確信します。

1～6年の児童が毎週木曜日に練習に励んでいる



練習の前には必ず全員で宿題を行う。上級生が自主的に下級生の面倒を見ている



ゲートボールの基本は4つじゃ！

- ① コートでプレーするのは1人だけじゃ！
- ② 打つのは常に自球のみじゃ！
- ③ スパーク打撃のとき以外、ボールに触れてはだめじゃ！
- ④ 全てのプレーはボールが止まってからじゃ！

ゲート ボールを広める為の活動

- ① 地域子ども会や児童館の協力を得て、子供達に呼びかける。15名程度で良い5～10分程度タッチとスパーク打撃をレクチャーすればすぐ出来るから地元のゲートボール場を使用して、現愛好者と共に試合形式の練習を行う。本ルールにとらわれずに楽しめるような工夫をして指導する。練習日は学校が終了してからの1時間または、土曜日の午前中をあてる。楽しさがわかれば学校でも、子供達のロコミで自然に広まる事が期待できる。
- ② 中・高校生には学校の協力を得て、クラブ活動に取り入れてもらう。指導員が出向き臨時コートを設置して指導する。15名程度からで良い。全国高校選手権大会に出場する事を目標にして、将来の国体出場に備える。
- ③ 地域においては、身体障害を持った方々にも配慮して、既存のチームと共にプレイしてもらう。特に聴覚障害の方に参加してもらうと、浦添市条例が進める「手話に対する理解を深め、手話の普及促進」に期待できる。又、「障害がある子とない子に社会の目に見えない壁」があると、障害児を持つ親の声にも答えて、心のバリアフリーを築いていけるものと思う。

まとめ

交通手段に頼らず、自分の地域の広場を利用して目に見える活動が、地域住民の活力になると思います。子ども達から障がいを持った方達も巻き込んでユニバーサルスポーツとして共に楽しい活動が続けることが出来れば、地域活性化とリーダー輩出にもつながり「人に優しい住みよい地域社会」を確立していくと思います。

“ レッツ・トライ・ゲートボール ”

謝 辞

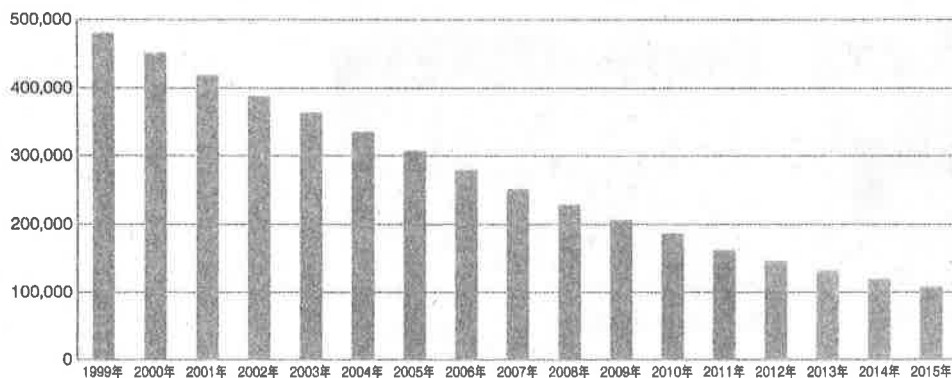
この研究発表を作成するにあたり、資料をくださった大城理事長はじめ沖縄県ゲートボール連合及び浦添ゲートボール連合役員の皆様他ゲートボール愛好者の皆様のご理解、ご協力に感謝申し上げます。てだこ市民大学において学びを共にした在校生、卒業生の皆様との交流、ありがとうございました。又、2年間におよぶ事務局のサポート、奮闘に感謝申し上げます。これから市民の為の生涯学習、自己啓発の学び舎を持続されますよう切望いたします。

参考・引用文献

- ・沖縄県ゲートボール連合提供資料
- ・初心者&審判員用教本 作：大城哲夫
- ・（公益財団法人）日本ゲートボール連合 情報誌
- ・（公益財団法人）日本ゲートボール連合 公認スポーツ指導員教本
- ・てだこ市民大学講座資料、他関係ネット 配信より

国内の会員数は16年間で約1/5に減少!

①ゲートボール会員数の推移



1999年時点では48万0081名もいた全国のゲートボール会員数が、2015年には10万6646名となり、右肩下がりに減少している

②都道府県別会員数 (2015年度)

順位	都道府県	人数
1	新潟	6305
2	長野	4922
3	東京	4540
4	鹿児島	4456
5	神奈川	4178

47都道府県ゲートボール団体の中で会員数が多いベスト5が、上記の5都県。東京と神奈川は人口の絶対数が多いこともあるが、新潟、長野、鹿児島は様々な普及策を高じて会員数を維持している

世界では50の国・地域に普及している!

③ゲートボール普及マップ (2017年1月1日現在)



中国の競技人口は日本の約5.5倍!

④世界ゲートボール連合に加盟している国・地域の競技人口

順位	国・地域	競技人口
1	中国	550万人
2	日本	100万人
3	韓国	25万人
4	台湾	15万人
5	ブラジル	1万人

世界ゲートボール連合に加盟している15団体の中で、中国の競技人口は日本を遙かに上回り、他の国・地域を圧倒。中国政府の強力な支援もあり、いまなお成長中である

- ※ 世界ゲートボール連合 加盟団体 (15)
- ※ 普及国・地域 (10)
- ◆ 普及開始国・地域 (15)
- ◇ 要請依頼国・地域 (10)

ジュニア女子1部クラス
(15歳以上18歳未満の女子)

優勝 作新クラブ(栃木)



準優勝 CLARK広島楓(広島)
第3位 出雲西高校女子(島根)

ジュニア2部クラス
(6歳以上15歳未満の男女)

優勝 大垣ジュニア(岐阜)



準優勝 DoDoフェニックス(京都)
第3位 久慈来内ジュニア(岩手)



続けて打撃できるように、目標ボールを固定して行っているタッチ練習

二戸市西小学校

むずかしいから
練習するワン!



盛岡市

**本宮地区を中心に小学生～
高校生の25名が活動中**



盛岡市本宮地区では古くから、町内対抗3世代ゲートボール大会が行われ、ほとんどの子どもがゲートボールを体験するほか、児童館活動でもゲートボールを実施している。これらを窓口として、盛岡市ゲートボール協会ではジュニア普及を行い、現在では、小学生～高校生の25名がプレーをしている。

以前は、大人と一緒に木曜日夜に練習をしていたが、6年前からはジュニア選手が集まりやすいように毎週日曜日9～16時に、市中心部にある下鹿妻北近隣公園で行い、毎回、10名前後の小学生が指導者とともに練習に励んでいる。「時々、顔を出してくれる先輩の高校生やユース選手が小学生の目標になっています」(指導者・谷藤正志さん)

このような活動が市立向中野小学校の校長先生の目にとまり、2017年度から学校のクラブがスタートすることも決定した。

北上市

**全国ジュニア大会2年連続出場
の口内小学校**

口内小学校では、5年前から地域の人々を講師として招いて、昔からの風習や遊びを子どもたちに伝える「きらめき講座」を実施しており、学校からの依頼でゲートボールも参加するようになった。これでゲートボールを体験した子どもからもっと練習をして全国ジュニア大会に出たいという声があり、8名が毎週木曜日、授業が終わったあとに校庭で練習に励んでいる。二戸市のジュニアと同様、練習の前には必ず宿題を行う。

「こうしたことが学校や父兄の理解につながっています」(指導者・及川康彦さん)

子どもたちの目標になっているのが全国ジュニア大会。「年々、勝ちたいという思いは強くなっているようで、そのために友だちを誘ってきたり、その輪は広がっています」



平成29年度(2017年度)沖縄県ゲートボール連合事業計画 案

月	日	事業内容	会場地	申込締切日	備考
4	8日(土) 16日(日) 18日(火)～ 19日(水) 23日(日)	役員・専門委員委嘱状交付式&合同会議 賛助会員大会4月例会 伊江島ゆり祭りGB大会 JGU1級会総会	県体協スポーツ会館 具志川GB場 伊江村 東部会GBコート	15:00～17:00 4/6(木) 4/6(木) 協力事業 協力事業	会長・副会長・理事長・理事・監事・専門委員 ◎県体協加盟団体連絡会議 4月28日(金)県体協スポーツ会館
5	9日(火) 11日(木) 17日(水) 21日(日) 25日(木)	九州地域GB協議会/第1回理事会 平成29年度会計監査 専門委員会 賛助会員大会5月例会 平成29年度第1回総会	鹿児島県 県連合事務局 具志川GB場 沖縄市産業交流センター	5/11(木) 13:00～17:00	◎九州ろうあ者GB大会 於:浦添ドーム 5月14日(日) ※南春連第1回役員会 5/12(金) ☆第32回全国選抜GB大会 於:岡山県 5月27日(土)・28日(日)
6	11日(日) 18日(日) 25日(日)	各地区審判員連盟対抗予選 賛助会員大会6月例会 各地区審判員連盟対抗GB大会	各地区 具志川GB場 具志川GB場	6/8(木) 6/15(木)	◎県体協臨時評議員会 6月 日() ※今年度は、3級審判員の資格試験は当初予定にありません。
7	2日(日) 16日(日) 22日(土) 30日(日)	各地区審判員連盟対抗GB大会予備日 賛助会員大会7月例会 平成28年度後期・平成29年度更新講習会 第38回沖縄県ゲートボール選手権大会 兼第33回全日本GB選手権大会派遣選考会	具志川GB場 具志川GB場 南部地区 具志川GB場	7/6(木) 09:00～12:00 7/20(木)	◎予定会場地:八重瀬町 ◎地区代表形式 第18回全国社会人大会 7/29・30日
8	12日(土) 13日(日) 20日(日)	平成28年度後期・平成29年度更新講習会 平成28年度後期・平成29年度更新講習会 賛助会員大会8月例会	北部地区 中部地区 具志川GB場	13:00～16:00 09:00～12:00 8/10(木)	◎予定会場地:金武町 ◎予定会場地:沖縄市
9	10日(日) 10日(日) 13日(水) 16日(土) 17日(日) 24日(日)	賛助会員大会9月例会 第1回表彰審査委員会(日ヶ表彰) 専門委員会 第9回沖縄ねんりんピックGB交流大会 第9回沖縄ねんりんピックGB交流大会予備日 県GB連合活動資金造成GB大会	具志川GB場 具志川GB場 具志川GB場 具志川GB場 具志川GB場 具志川GB場	8/31(木) 8/31(木) 地区代表形式 9/16(土)	☆第72回国民体育大会GB競技 於:愛媛県 9月2日(土)・3日(日) ※ねんりんピック秋田2017 於:秋田県 9月9日(土)～11日(月) ☆第33回全日本GB選手権大会 於:北海道 9月23日(土)・24日(日)
10	1日(日) 7日(土) 14日(土) 15日(日) 22日(日) 29日(日)	賛助会員大会10月例会 平成28年度後期・平成29年度更新講習会 第20回沖縄県スポレク祭 第26回オープンGB祭り 予備日 JGU1級会親睦競技会&研修会 下地幹郎会長杯ゲートボール交流大会	具志川GB場 宮古地区 具志川GB場 具志川GB場 具志川GB場 具志川GB場	9/21(木) 13:00～16:00 10/5(木) 協力事業 10/19(木)	◎予定会場地:宮古島市
11	2日(木) 4日(土) 5日(日) 18日(土)～ 19日(日) 26日(日)	専門委員会 おきでん対話旬間ゲートボール大会 賛助会員大会11月例会 第34回成年親善GB大会 第68回県民体育大会ゲートボール競技	具志川GB場 具志川GB場 具志川GB場	10/29(日) 10/26(木) 11/16(木)	☆第39回九州ゲートボール大会 於:大分県九重町11月11日(土)・12日(日) ◎地区代表形式
12	3日(日) 8日(金) 9日(土) 17日(日) 26日(火)	賛助会員大会12月例会 第2回表彰審査委員会(県表彰) 県GB連合活動資金造成GB大会 第34回コザ信用金庫杯GB選手権大会 県GB連合活動資金造成GB大会 役員・専門委員合同会議	具志川GB場 具志川GB場 県総合レクナム 県総合レクナム 具志川GB場	11/21(火) 17:30役員集合 07:15役員集合 12/3(日)	
1	14日(日) 28日(日)～ 29日(月)	賛助会員大会1月例会 役員・専門委員宿泊研修会 (平成30年度事業計画案作成検討会議)	具志川GB場	1/4(木)	
2	3日(土) 4日(日) 18日(日) 25日(日)	JGU1級会親睦競技会&研修会 賛助会員大会2月例会 2018年もうすぐ春GBオープン大会 (公財)日本GB連合功労者表彰伝達式 県GB連合功労表彰式 第32回全国選抜大会沖縄県予選	具志川GB場 具志川GB場 具志川GB場	協力事業 1/25(木) 1/25(木) 2/15(木)	◎期日厳守
3	3日(土) 4日(日) 11日(日) 18日(日)～ 20日(火)	JGU1級会親睦競技会 賛助会員大会3月例会 県GB連合活動資金造成GB大会 賛助会員大会納会	具志川GB場 具志川GB場 具志川GB場	協力事業 2/22(木) 3/4(日)	◎県体協臨時評議員会 3月 日()



卒業研究

学部名：健康福祉・スポーツ振興学部

氏 名：西 啓亨

1. テーマ

死を考えることで今を輝いて生きる

2. テーマ設定理由

死は平等に、全ての人に訪れる。しかし、どれだけの人々が、自分自身の死、家族の死などについて、考えているだろうか？ 「死ぬ」なんてことを口出すことは、縁起でもない、不謹慎だと意味嫌われているかもしれないが、何も準備しないまま死を迎えることこそ、最も不幸である。

死に向き合うことは、死ぬまでの生に向き合うことであり、「死に方」と「生き方」とは、表裏一体である。難しいテーマであるが、この最終ゴールを家族、身近な地域の方々と話し合うことで、今という時を輝いて生きることができるのではないかと考える。

3. 項立て（概要でも良い）

・浦添市地域住民への啓蒙活動

市民公開講座の開催（平成 29 年 7 月）実施済み

今後の計画：

浦添市役所職員向けの講座開催

→ 職員による地域単身者への普及

地域公民館での講座開催



卒業研究

学部名：健康福祉・スポーツ振興学部

氏 名：与那原孝

1. テーマ

地域福祉実現のための自治会加入率向上

2. テーマ設定理由

自治会役員と民生委員を両立して活動するにあたり
地域福祉の必要性を痛切に感じた。

3. 項立て（概要でも良い）

- 1、自治会加入率の低下傾向
- 2、社会福祉法改訂の求めるものは
- 3、勢理客地域の現状
- 4、今後地域福祉を成功させるには

地域福祉実現のための自治会加入率向上

与那原 孝

一、自治会加入率の低下傾向

浦添市にある自治会として登録されている41自治会の加入率をご存知でしょうか。浦添市平均で約25%です。つまり4世帯に1世帯だけが加入している割合です。【図1】の浦添市近隣の自治体の加入率をみても、うるま市を除けば約20%～30%で推移しています。しかも、2006年、2010年、2015年と、年を追うごとに低下の傾向にあります。

沖縄の人々は昔から、「ユイマール精神」で隣近所と相互扶助により生活してきて地域の絆は強かったはずなのに。

何が変わったのでしょうか。核家族化、少子高齢化、自分以外のものに無関心、地域との関わりに煩わしさを持つ若者達が増えているのでしょうか。

地域福祉の課題 2)自治会の加入率 浦添市近隣の自治会加入率			
自治体名	2015年	2010年	2006年
① 名護市	33.8%	45%	—
② うるま市	54.1%	62%	64%
③ 沖縄市	32.8%	37%	40%
④ 宜野湾市	30.2%	35%	38%
⑤ 浦添市	24.9%	26%	27%
⑥ 那覇市	20.4%	22%	25%
⑦ 豊見城市	31.8%	35%	42%

【図1】

(てだこ市民大学 2017 年 7 月 20 日
「浦添市の地域福祉実践 (CSW) I」
講義資料より)

都市化が進み、個々の住宅が集合住宅へシフトされていったのも一つの原因とも思われます。狭い敷地に建てられた高層のマンション。建物自体に強固なセキュリティの為のオートロック。プライバシーを重視し極力住人同士が顔を合わせない設計。この状態では隣の人を知るのはむづかしい。

私たちの幼少の頃は、「あの人は誰々のお父さん、お母さんだね。」とか通りを歩く人は何処どこにすんでいる人よね～。との会話は日常でした。賃貸にしろ、現在の集合住宅ではないので「あの兄ちゃんはおうちの家を借りてるひとだね～。」と、それが地域だったのかどうかは分かりませんが、とにかく、近所の住人は知っていました。

二、社会福祉法改訂の求めるものは

【図2】のように社会福祉法が改訂され、今年の4月1日より施行されるとのことです。難しい法律用語なので自分なりに解釈すれば「地域住民等は地域に於いて、福祉サービス等を必要とする者あれば、これを積極的に支援する」。当たり前のことであるので特に珍しいことではないのですが、これをあえて法律を改正してまで明示するその根拠は何なのでしょう。

私が思うには、来る2025年問題、約800万人いるといわれる団塊の世代が後期高齢者となって超高齢化社会へ突入します。彼らは敗戦国日本が戦後の復興を目指し、他の先進国に追いつけ、追い越せと高度経済成長期を築いてきた世代です。

その2025年問題をはじめとして危機迫りゆく高齢化、それに伴う認知症の爆発的発症が予測されます。

医療・介護・福祉サービスの整備が急務である一方、「社会保障財源の崩壊」が懸念されております。



【図2】

(てだこ市民大学 2017 年 7 月
13 日「浦添市の地域福祉施策」
講義資料より)

これにより、「地域住民」自身が「地域福祉の担い手」として明確に位置づけられ、より一層、住民参加による福祉のまちづくりが求められることとなりました。

三、勢理客地域の現状

私が住む勢理客の地域は、米軍基地のキャンプキンザーを目の前にし、外人住宅が多くあります。

今でもその名残がある中で、戦後70年、その外人住宅も老朽化し、取り壊した後には豪華なマンションが建っていきます。今の勢理客はマンション、アパートが林立し、居住している人は、自治会の存在すら知らないのではないかと思います。

今、自治会の会員は未整備の「スージグァー」から入り、昔ながらの一軒家に住む方々がほとんどで、二世の時代になっても、自治会費を親がずっと払い続けるのが当たり前と思っています。

加入率は27%程度、そのうち公民館を利用して、様々な活動をしているのはその数パーセント。そしてその多くはもちろん老人達です。彼等は昔の「ユイマール」を良く知っていて、その相互扶助の精神は多いにあるものと思っています。

元気にしていた隣の住人の、家の電気が二日、三日、灯かなければどうしたのかなと心配して覗きに行きます。勢理客という地域に愛着とプライドを持っていて、那覇市に一番近い字として商業や工業で栄えてきました。

伝統の国選択無形文化財の「勢理客の獅子舞」もそのひとつです。旧暦の8月15夜に行われるこの行事は勢理客最大のお祭りです。多くの人がこの獅子舞を見ようと集まってきます。先程述べたマンション、アパートの住人たちもその中にいます。

ビール片手に「お客様です。」このイベントの裏方さん、つまり設営、来賓の接待、余興等是一部の人たちの手で支えられています。獅子舞保存会を中心にし、婦人会、老人会等が協力をし成り立っているのです。この中に先程の「ビール片手のお客様達が」お客様ではなくスタッフとして参加してくれればありがたいのにといつも思っています。

【勢理客の獅子舞】



四、今後地域福祉を成功させるには

現在。ささやかながら取り組んでいるのが、公民館を拠点として高齢者の方にパソコンを教えています。自分の分かる範囲、出来る範囲でと教室を持っているのですが、これが結構重宝がられています。

私たちメンバーは公民館にお世話になっているとの気持ちから、できる限りの強力をしたいとの思いを共通に持ちます。新年会、敬老会へも積極的に参加し、特に敬老会ではパソコンクラブとして余興もやります。舞台上に上がって一生懸命踊っているメンバーの半分は75歳以上のお祝いしてもらおう側の世代です。

「いきいき健康クラブ」にも加入して、皆で活動しています。民生委員の私の担当で家から出ない方がおり、何とか外に連れ出そうと、苦勞して連れて来たのがきっかけですが、今では私のほうがハマってしまっています。

それから神森小学校併設の森の子児童センターとの共同で、地域起しをしようと「浦添市街づくりプラン賞」に応募しました。

目標は「ピパーズ」という植物を勢理客中の家庭に広めよう、大人も子供も、おじいちゃんも、おばあちゃんも一緒になって苗植えから、その後の水かけまでみんなでやって、勢理客中をピパーズで一杯にしようとの思いです。

ピパーズは八重山が有名で、多くの石垣につる状にからみつき、写真のような実をつけます。その実をすりつぶして胡椒として利用します。健康に非常によく、特に高血圧の方、女性の艶々肌には最適との効能です。

ささやかな活動を、お話ししてきましたが、一番のターゲットは若いお父さん、お母さんの自治会への加入です。そして地域の若い力として活躍して頂きたい。その思いから、これから先その若い力の獲得に全力を尽くして行きたいと思います。

【ピパーズの実】





卒業研究

学部名：健康福祉・スポーツ 振興学部

氏 名：仲西郁代

テーマ

ビューティタッチセラピーで
介護予防・認知症予防・健康寿命の延伸

テーマ設定理由

2016年日本人の平均寿命は男性が80.9歳、女性が87.14歳となりました。長寿にはなりましたが、健康で自立した生活が出来る健康寿命の平均は男性72.14歳、女性74.79歳です。

高齢化が進む中で、健康に暮らす健康寿命との差は男性8.84年、女性12.35年です。今後平均寿命が延び、その差は益々大きくなると予想されています。その間は介護や医療が必要とされ、医療費の高騰、家族や次世代の人への負担もおおきくなります。

高齢になっても、認知症にならず、心も体も健康を維持し笑顔で暮らすことを応援するビューティタッチセラピーを多くの人の健康維持に役立てたいとの思いで、この活動を選びました。

1、はじめに

市民大学「健康福祉・スポーツ振興学部」で、高齢者の健康、地域福祉の問題などを学び、今後もますます高齢者人口の割合が高くなることを知りました。それは、現役世代に大きく負担をかけることになり、自分を含めて、健康寿命を出来るだけ伸ばす努力が必要と感じました。

同じ時期に介護美容ビューティタッチセラピーの研修を受ける機会がありセラピスト活動は介護予防・認知症予防に効果がある事を学びました。

そこで、ビューティーセラピストの認定を受けたメンバーから賛同者を募り、チーム「ククル、ドウ」（心と身体）を結成し、浦添市を中心に活動を開始しました。

2、ビューティタッチセラピーとは

やさしく肌に触れて、血流とリンパの流れを促し、心と身体に良い影をもたらします。

「美しくなる」「若々しくなる」「トキメキ感」など「触れる」ことによる癒しとストレス緩和が認知症の悪化を遅らせ、免疫力を高め、健康寿命の延伸に効果がある介護美容です。

3、チーム「ククル・ドゥ」の活動の経過

セラピストとしての活動で、元気・笑顔・自律をめざし理想のピンピンコロリ実現を多くの人に広げたいと思います。地域の健康寿命の延伸にいくらかでも貢献すると同時に自分も元気を維持できると考え、取り組むことにしました。

◎平成 29 年 4 月 26 日結成総会・・・社協ボランティアセンター室

日本介護美容セラピスト協会の認定を受けたセラピスト 9 名でチーム「ククル・ドゥ」を結成

① 会則の検討と承認

② ボランティア団体として

浦添市ボランティア団体連絡協議会に加入

③ 浦添市社会福祉協議会に団体加入

④ 市民大学「学びフェスタ」で体験コーナ

多くに来場者に認知してもらう機会になりました。

⑤ その後、社協や行政担当、地域老人会などにチームの活動を伝えたことで活動の場が広がりました。



テレビ番組「島人の宝」での放映で多くの反響が活動につながりました。

4、チーム「ククル・ドゥ」活動の内容

肌をさする事でリンパの流れ、血流をスムーズにし心の安定、脳の活性化、免疫力の向上、皮膚の保湿などの効果が検証されています。その手法はいろいろあります。

下記 7 つの手法から、選択し、体験コーナ、講座、施設での施術等で触れる事、さすりながらの対話でコミュニケーションを深める事を心がけてきました。

① ハンドセラピー：肘から指先までの施術

② フットセラピー：膝から足の裏、指等への施術

③ フェースセラピー：顔のお手入れ

④ メイク：化粧をする事でのリフレッシュ

⑥ ベビーアタッチメント：赤ちゃんにベビーマッサージをする
ための手法や効果を母親に指導

⑦ アロマセラピー：目覚めのアロマオイル・眠りのアロマオイル等でのハンドセラピーにアロマを使い心の安定にもつなぐ。

5、ビューティタッチセラピーの効果

「触れる」効果は体、脳・心・肌などに多くの効果が検証されています。
ルイ・パシツール医学センター・大寿会病院との共同研究（セラピーすることでインターフェロンが増え免疫力が高まる）京都橘病院や長崎病院、西九州大学と共同で「心、脳、体、肌」の4つの角度で検証している。

① 体への影響

- ・筋肉の緊張を和らげる
- ・活動性の高まり
- ・呼吸が楽になる
- ・排泄の促進
- ・質の良い睡眠と休息

② 脳への影響

- ・認知症の症状悪化を遅らせる
- ・集中力アップ
- ・注意力アップ

③ 心への影響

- ・リラクゼーション
- ・ストレス緩和
- ・抑うつ感情の減少
- ・不安や恐れ、孤独からの解放

④ 肌への影響

- ・保湿
- ・肌のつや
- ・血流、リンパ液の流れをよくする
- ・はだの新陳代謝の活性化



セルフマッサージ（レッスン）
自分の健康維持
介護中の家族のために



老人会での講座

仲良く会話を楽しみながら
認知症・介護予防・脳の活
性化・ストレス解消



障害者施設での個別施術

心が落ちつき、気持ちが良い
硬直した指が少し伸びるようにな
った。夜よく眠れるようになった



フェースセラピーとメイクの
レッスン

幾つになってもおしゃ
れは楽しい。どこかに
でかけたくなっただけ

6、浦添市の現状と介護予防の取り組み

人口約 11 万の浦添市は市民の平均年齢が 40 歳と若く、子ども達の人口も多い、若くエネルギーにみちています。

一方高齢化率 18%と全国平均(25%)に比較して低い、今後増加することが推計され、2025 年に 5 人に 1 人が 65 歳以上になる見込みです。

そこで、生活の質の向上と健康寿命を延ばすことで、健全な長寿社会の構築は大切な課題として、行政も各種事業で取り組んでいます。

浦添市の福祉行政の中でコミュニティーソーシャルワーク(CSW)、地域包括支援センターなどの事業、介護保険サービス、障害者自立支援サービス、地域住民を巻き込んだ見守り活動などで、関係者がきめの細かい活動に取り組んでいます。

その中で、ビューティタッチセラピーの活動が活用できる分野の可能性は大きいと感じています。私たちは、多くの人にその効果を少しずつ知ってもらうことから、進めたいと思いました。

7、チーム「ククル・ドウ」活動経過

不定期に行う講座や体験コーナーなどこれまでに約 20 回以上の活動を実施してきました。その中で定期的に同じ対象者の効果の経過を見ることも必要と考えて毎週 1 回 4 人の障害者を対象に施設で個別の施術を行っています。硬直がある人、心の不安定なひと、言葉での対話が出来ない人、怒りっぽい人、不眠の人、半身・全身不随の人など通常の社会で接することのない人たちと接する不安も抱えながらこの活動をはじめました。

トラブルもなく 4 週一巡した対象者からは、気持ちの落ち着き、安眠などの効果で毎回楽しみに待っているという感想が聞け、職員からも、夜間の安眠が職員の負担軽減にもなっていると報告を受けています。

学術的に検証されているとはいえ実践で体験できたことで活動のやりがい・自信につながり、継続したいと関わっている仲間たちも、意欲的に協力してくれます。

これまで、福祉プラザ、中央公民館などでは、レッスン形式の講座を開きました。子育て中のおかあさん、介護中の主婦、自分の介護予防のため、職場で活用したいなど多彩な目的の受講者でした。

「いきいき体操」の 2 部としての自治会、老人クラブでの講座などは元気な高齢者対象に開催しました。

港川中学校の「夏休みぼらんちゅキャンプ」では、中学生がハンドセラピーを、習いその後地域の高齢者と肌をふれ会話をしながら交流をする手段として活用してもらいました。

障害者施設では、毎週ハンドセラピーやフットセラピーを施術して喜ばれ硬直や不眠などの改善の効果も聞いてやりがいを感じています。

この手法で、高齢者の介護予防だけでなく、介護する人、子育て世代、子供たち、障がいのある人、そして自分自身の心と身体を元気にすることが出来

る事を実感できました。

まとめ

実践して期待以上の効果を感じ、どの世代でも肌に触れる事の大切さ、少しのゆとりが心と身体に及ぼす影響の大きさに驚いています。

課題はこの活動には材料費や交通費などが伴います。無償ボランティアでは継続が難しいのですが、多くの福祉施設では、そのための費用を出せない現状をいわれます。この活動の効果等学術的に検証され、実際の体験者からも効果を聞いていますが、保険外診療という位置づけのため、有償ボランティアとしての施設での活動の拡大が難しいこともあります。

体験コーナや助成金活用で無償ボランティア活動を続け、少しでも認知度を高める努力をしている現状です。チームとして仲間で助け合いながら、この活動を地道に継続したいと思っています。

活動のきっかけになった 2 年間の市民大学での学びで貴重な講話をしていただきました多くの講師、そして事務局のサポートに感謝申し上げます。

卒業研究報告

健康福祉・スポーツ振興学部

仲西郁代

テーマ

介護美容ビューティタッチセラピーで
介護予防・認知症予防
健康寿命の延伸

2016年の日本人の平均寿命と健康寿命

	平均寿命	健康寿命	差
男性	80.9歳	72.14歳	8.76歳
女性	87.14歳	74.79歳	12.35歳

要介護又は要医療の期間が8年(男)～12年(女)
健康寿命を延ばす努力が喫緊の課題

活動の実践

元気・笑顔で、病気にも認知症にもならず、
健康寿命の延伸が出来る。

一人でも多く「介護も医療にもお世話にならない」

その手段の一つとして、ビューティタッチ
セラピーの活動を始めました。

「学びフェスティバル」で 体験コーナー

活動のスタートは
「ここから」
体験した多くの人に喜ば
れ、自信を得た貴重な取
り組みでした



チーム紹介

ビューティタッチセラピスト9人が、資格をいかして、チームで、地
域の介護予防、健康寿命延伸活動に取り組むことを目的に
平成29年4月に結成した。

テレビ番組「島人ぬ宝」で
放映されて、色々なところ
から活動につながりました。
マスコミの力はすごい！



ビューティータッチセラピーとは

スキンケアやメイキャップ等を通して肌に触れることで心や身体の健康を促す「美容療法」のことです。

活動の趣旨・目的

チーム「ククル・ドウ」は何をするの

高齢者・介護する家族に

地域において、メンバーが持つ知識と経験、資格を活用し、スキンケアで地域の高齢者、介護する家族の「元気」「笑顔」「自立支援」を応援する。



どんな方法で?

ビューティータッチセラピストの活動

在宅・その他 	在宅高齢者の定期訪問 スポーツジム 美容院 カフェ 温泉 送迎付きセラピー
高齢者施設 	有料老人ホーム サービス付き高齢者住宅 グループホーム 知的障害者施設 シニアマンション 高齢者住宅 デイサービス 特別養護老人ホーム
行政・自治体 	社会福祉協議会 老人会 公民館 いきいき教室 ふれあいサロン 地域包括支援センター

①講座(レッスン)ハンドセラピー、

手は第2の脳



期待できる効果

- ・お互いに肌をふれあいながら、対面で会話(コミュニケーション)できる。
- ・指先から肘にかけて、優しくなでて、リンパの流れを助け、むくみをとる
- ・肌の保湿と同時に、血流をよくし、全身の循環がよくなり体調を整える
- ・リンパ液の流れがよくなり、免疫力を高め、自律神経の安定につながる

②講座(レッスン) フェイシャルセラピー

期待できる効果

顔に最も近い顔のケアは

- ・ストレス解消
- ・リラックス効果
- ・睡眠改善
- ・肌の保湿



③中学生が地域の方にハンドセラピー



④ディケアなどで定期的に

心と体に作用するビューティータッチセラピーを
定期的に施術することで

- ・「美しくなる」「若々しくなる」「期待感:ときめき」
- ・触れることによる癒しとストレスの緩和

認知症の悪化を遅らせたり、
健康寿命延伸効果が期待できる

⑤障がい者施設でのハンドセラピー



硬直した指が少しずつ伸
びるようになった。
夜はよく眠れるようにな
った

触れる力の効果

身体への影響

- ・筋肉の緊張をやわらげる
- ・活動性のたかまり
- ・呼吸が楽に
- ・排泄の促進
- ・質の良い睡眠と休息

脳への影響

- ・認知症状の悪化を遅らせる
- ・集中力の向上
- ・注意力アップ

肌への影響

- ・保湿
- ・肌の艶
- ・血流、リンパの流れ促進
- ・肌の新陳代謝の活性化

心への影響

- ・リラクゼーション
- ・ストレス緩和
- ・不安や恐れ、孤独からの解放
- ・抑うつ感情からの減少

まとめ

心と体の美容療法は学術的にも効果が検証され、活動の中でも多くの効果に出会えます。ぜひ広めたい活動です。

チームとして、仲間と補い合いながら、地道に継続したいと思います。

活動のきっかけになった市民大学で多くの示唆を頂いた講師や事務局のサポートに感謝申し上げます。

平成29年度

文化振興・教養学部 テーマ一覧

氏 名	研究テーマ
山崎 誠 砂川 順枝 下地 シズ子 崎枝 ななえ 仲宗根 生美	前田高地 4月25日～5月6日の12日間の激戦による、 その当時の浦添住民の状況を次世代の子供達へ伝えるために





卒業研究

学部名：文化振興教養学部

氏 名： 山崎誠 砂川順枝 下地シズ子

崎枝ななえ 仲宗根生美

1. テーマ

前田高地 4 月 25 日～5 月 6 日の 12 日間の激戦による、
その当時の浦添住民の状況を次世代の子供達へ伝える為に

2. テーマ設定理由

米軍に「ハクソー・リッジ」と呼ばれた前田高地は、2017 年に映画となり一躍世間に知れ渡る所となりました。この映画により、海外や県外から目を向けられるようになった浦添市です。
しかし、浦添市民や子供達はどれだけ前田高地激戦について知っているのか疑問が生じ、当時の住民の様子や前田高地について調べる事にしました。
そして次世代の子供達へ語り継ぐ事を目的として、『前田高地激戦地マップ』を作成しました。

3. 項立て（概要でも良い）

1. はじめに
2. 前田高地とは
3. 聞き取り調査内容添付
証言者・・・ 手登根広子さん
証言者・・・ 又吉武市さん
証言者・・・ 石川仁栄さん
証言者・・・ 坂名城初江さん
参考文献より資料添付
うらそえ広報より・・・ 石川幸助さん
沖縄戦新聞より・・・ 宮本祐徳さん
字誌なかまより・・・ 又吉初子さん・宮城茂雄さん
宮城義信さん・照喜名重信さん
4. マップ作成による検討課題
5. おわりに
6. 参考文献資料
7. 協力者
別添：マップ

1. はじめに

前田高地激戦中や戦後の様子を、体験者から聴き取り調査を行い、文献等を調べてまとめました。

2. 前田高地とは

標高約 148m 位あり浦添市で最も高い場所です。現在では、浦添ようどれから墓地公園周辺の仲間・前田地区一帯をさしています。

1945 年 4 月 1 日に米軍が上陸し、宜野湾嘉数高地などで激戦が繰り広げられ 4 月 25 日に米軍は前田高地への攻撃を始め、5 月 6 日に日本兵が撤退するまでの 12 日間の激戦地となった場所です。当時の前田高地は巨大で険しく、ノコギリで切った様な断崖であった為、米軍から「ハクソー・リッジ」と呼ばれました。

又、南東側には、為朝岩(ハナレジー)・米軍には「ニードルロック」と呼ばれた、艦砲射撃の指標にされた場所があります。その場所を奪い合い激しい争奪戦の末、攻撃開始から 12 日目の 5 月 6 日に日本軍は撤退しました。

その後、米軍は首里から南部方面へと移動しました。

3. 聞き取調査資料及び参考文献

手登根広子さんの話

【特定した期日】

新学期が始まる日（4月10日頃）

【特定した場所】

前田 88 番地（広子さんの実家、警察署から二番目くらいの道を通って旧道に入り、前田のデイサービスから二番目のところ）

広子さんの母親の実家のお墓（前田小学校のグラウンドの北側、前田小学校の校舎からグラウンドを挟んで前田高地を見たときの右側、今でもそこは墓地）

くまーらの丘の壕（前田小学校の正門から出て 50m くらい行った右側）

【体験者名（当時の年齢）】

手登根広子さん（8 歳、昭和 12 年生、旧姓：石川）

【出典】

本人聞き取り（2017 年 12 月 23 日（土）に実施）

【内容】

広子さんの家は、父と母、祖母と祖父、兄弟のように一緒に育つたといこの姉と実の兄、3 歳になったばかりの妹と 8 人で住んでいた。父は農業をしており、母や祖母は機織りをしていた。父は戦争が激しくなってくると防衛隊にとられ、馬も 2 頭いたがとられた。いとこの姉と兄は学童疎開に行っており、広子さんも祖父母と一緒に疎開をする予定だった。しかし、疎開する船に乗るために港に着いたとき、広子さんは急に行かないと大泣きし、祖父母も「ひろちゃんが行かないなら、ばあちゃんたちも行かないよー」とのことで、3 人とも前田に帰ってきた。

その後、1944（昭和 19）年頃から、民間の屋敷に兵隊が配置されるようになった。広子さんの家には、母親たちが機織りなどの作業をする離れ（アサギグラー）があり、片付けたそこに、兵隊が 4,5 人くらい住んでいた。屋敷内の牛小屋や馬小屋の隣に張ら

手登根広子さんの話

れたテント内で、兵隊が4,5人並んで武器の整備や、修理の仕事をしていた。広子さんはそこで遊びながら、兵隊たちと友達になった。

屋敷のひとつ前、少し下ったところが当時の公民館で、石部隊の本部が置かれた。屋敷の前は石畳になっていたので、公民館から兵隊が上ってくるときには、靴がカッカカッカと音が鳴り、兵隊が来たことがすぐにわかった。石部隊から来る兵隊は見回りの兵隊だった為、その音が鳴ると広子さんの家で作業をしていた兵隊たちは屋敷の前で並び挨拶をしていた。広子さんも一緒に兵隊たちと並び、頭をなでられたことを覚えている。その時の兵隊は、怖い存在と言うよりは仲良しな存在であり、楽しい思い出だった。兵隊たちからは、印鑑や兵隊たちの家族の写真、色紙等を記念にもらい、屋敷内の壕に入れてあったが、戦争が終わった後には何も無くなっていた。

戦争が激しくなる前に、兵隊たちは首里の総本部に集められたため、みんな引き揚げていった。広子さんは戦争が終わったものだと思って喜んでいて、新学期の日の朝、広子さんは祖母に起こされた。学校に行くと思い、那覇のおばさんからもらった洋服とランドセルを持って準備していると、「学校じゃないよ、逃げるんだよ」と言われた。広子さんは学校に行きたがったが、学校はもうアメリカが攻めてきているから、学校には行けないと言われ、大事なランドセルだけを持って、泣きながら母の実家のお墓に避難した。そこには前もって父親がお米や砂糖、味噌や醤油などの食料品を、約1年分運んでおり、戦争が激しくなってきた場合には、終わるまでここにいて食料等を守るよう言いつけられていた。

少し離れた母の姉夫婦家族も少し離れたところに避難しているとのことで、広子さんと母親と妹は残り、祖父母が食料品を持って迎えに行くことになったが帰って来ない。姉家族のところにも来ていなかったとのことだったので、着く前に艦砲射撃にやられたのだと思う。

祖父母が出てしばらくすると、どこからか3名か5名の日本兵が入ってきて、出ていきなさい、と言われた。自分たちは家族を待っていて、食料品も守らないといけなから絶対に出ていかない、と言うと、民間は何の役にも立っていない、出ていかないなら殺す、と言われた。広子さんは、後で仲良しの佐藤隊長に言いつけてやろう、と思った。親戚たちが来たらすぐ食べられるように朝で作ってあったジュースのお

手登根広子さんの話

にぎりや、カツオや味噌などもすぐ持っていけるように籠に詰めてあったが、それも全部取り上げられて置いていきなさいと言われた。その時から、日本の兵隊、日本人が怖い、憎いと感じた。

そのまま出されて少し歩いたら艦砲射撃にあった。戻るにも戻れないし転びながら逃げているうちに、こっちおいでーと呼んでくれている壕に逃げ込んだ。くまーらという丘にあるお墓の壕で、そこには部落の人たちであろう人たちが結構隠れていた。そこに入って命拾いをし、その後何日立ったのかわからないが、アメリカ兵が来た。民間人がいることが分かったからか、日本人の2世のような人が通訳になり、「デーテコ、デーテコ」と、変な言葉で話す人が呼びかけていた。大人たちも、日本兵なのか、アメリカ兵なのか、どこの人なのかね、と話をしていた。それでも誰も出ていけないので、煙が出てくる黄燐弾を投げ込まれ、一旦はみんな奥に逃げ込んだが、呼吸ができないので、一人、一人と出て行った。出ていくと入り口で水を飲まされたり、口に布きれをあてられたりしていた。そこから出てきた人たちは、ちょっとした広場に2,30名並べられた。アメリカ兵は少し離れたところで話をしており、今思うと、コザの避難所に連れて行く相談をしていたのだと思う。そこに日本兵が攻撃をしてきたので、アメリカ兵たちはその応戦をしている間に、一人のおじーが、「なまやさ！ ひんぎれー！」と言うので、みんな我先に逃げて、石嶺を通り首里に向かった。そこからは、広子さん達家族は、その部落の人たちと一緒に逃げた。

飛び出して逃げている途中に、死体が道のそばに転がっていたり、崖から半分落ちていたり、たくさんの死体を見た。その時にとってもビックリしたが、それから後は感覚が麻痺していたのか、死体を見ても、あ、死んでる、くらいにしか感じなくなり、怖いとかかわいそうとか思うことはなかった。

その後もたくさんの悲惨な状況を見たり、芋の汁を吐きそうになりながらも生きるために必死で飲んだり、照明弾に照らされる中道の溝に隠れたりしながら逃げていた。糸満を超えたあたり、前川（メーガー）では、そこは本当に静かで、戦争なんか無かったかのように、人もいて、畑もあって、昼間でも川で洗濯したり水浴びをしたりして遊べた。その晩に防衛隊から除隊になった父親が合流した。メーガーにいたときに

手登根広子さんの話

は戦争は終わっていたのだと思う。翌朝、洞窟に入っていた人はみんなアメリカの捕虜になった。

捕虜になった際に怪我をした父親は百名の軍病院に連れて行かれ、怪我が治るとハワイに連れて行かれた。ハワイで飛行場とかを作っていたらしい。広子さん達は佐敷の収容所に収容された。

佐敷でしばらく過ごした後、浦添の人たちは、今の浦添中学校の西側、仲間樋川周辺に収容所のような感じでデントが張られ、そこに集められた。何日かいるうちに父がハワイから帰ってきたので、軍にトーパーヤーの材料をもらいに行き、仮小屋を作った。前田の屋敷は残っていた。

【付記】

【記入期日】

2018年1月11日（木）

【記入者】崎枝

又吉武市さんの話

【特定した期日】

10・10 空襲の日

慶良間占領の日

我如古まで進攻された日とその付近

【特定した場所】

仲間2丁目17の5（武市さんの実家）

安波茶橋のところの墓（現在は大きいマンションがあり、そこの角の下の方）

【体験者名（当時の年齢）】

又吉武市さん（7歳）

【出典】

本人聞き取り（2017年12月2日（土）に実施）

【内容】

又吉さんの実家は仲間2丁目17の5にあり、慶良間、北谷、現在の天久方面も望める地域であった。そのため、那覇の10・10空襲、城間の飛行場が攻撃されている様子等を実家近くの木に登り、目の当たりに見た。慶良間が占領された時点ではまだ実家にいた。木の上からは、慶良間から出てきた米軍の船が海に並び、読谷、北谷、嘉数方面に砲撃をしている様子を見ていた。城間あたりにも艦砲射撃や、アメリカの飛行機が爆弾を落とす様子も見た。昼は慶良間から出てきた船が海にずらっと並ぶが、夜には慶良間に帰るので、海には何もなくなっていた。

又吉さんの家族は、父、母、20歳くらいの兄、小学校4年生の兄、祖父、祖母。父はフィリピンに出稼ぎに行き、一番上の兄は現地招集され、祖父と祖母と二番目の兄は熊本に疎開に行っていた。一番上の兄が宜野湾の我如古に配置された後、戦死したとの報せを聞き、この辺も危ないとのことで、母と二人で避難を始めた。

又吉武市さんの話

最初は安波茶橋近くの大きな親戚のお墓に避難した。お墓の中の厨子甕は全部引っ張り出してあった。中に入ることは入ったが、女子供はいつも入り口側だった。艦砲射撃も来るし、飛行機からも爆撃される。一日目の夕方くらいに、お墓の上あたりに大きな爆弾が落ちた。崩れないうちに出ようとなったが、昼は歩くのが難しため、二日目の夕方から首里に向けて避難を始めた。

墓を出た後は、経塚を通って、首里を通り、繁多川、東風平方面を休みながら歩いて行った。途中でグラマンという米軍の飛行機に攻撃された。日本軍も道端にたくさん倒れていた。母に手を引かれながら、倒れている死体の上を跨ぎながら歩いていると、まだ生きている日本兵がいて、その兵隊に足をつかまれ、「水をちょうだい」と言われ、とても驚いた。母が足を蹴飛ばして一緒に逃げたが、あの兵隊に足をつかまれた感覚は今でも思い出す。

東風平から糸満の伊敷を通り、米須のウージ畑で母が怪我をしたため、そこから一人で避難する住民の列に加わって歩いているところに、米軍の捕虜となった。母は糸満の野営病院に收容されていたところ、偶然再会できた。

糸満から名護の久志村の收容所に移った。そこでしばらく過ごし、仲間に戻って来たのは2年生になってからで、暑いときだった。帰ってきたときには家は全部なくなっていた。浦添村民の人は、仲間の城址の近く、浦添小学校の近くに集められて、そこから各字に帰っていった。仲間の住民は早くから自分たちの屋敷跡に戻って生活できた。水はないから、仲間樋川の水で生活した。

【付記】

【記入期日】

2018年1月11日（木）

【記入者】崎枝

石川仁栄さんの話

【特定した期日】

- ・戦前の様子
- ・10・10空襲
- ・戦後

【特定した場所】

- ・前田小学校周辺のお墓
- ・南エントランス

【体験者名（当時の年齢）】

石川仁栄さん（10歳、当時小学3年生）

【出典】

本人聞き取り（2018年1月28日（日）に実施）

【内容】

戦争当時小学校の3年生で進級したばかり、10歳になったばかりでした。現在は82歳になっているんですよ。

まずは、浦添小学校の状況から。現在の浦添小学校の位置と変わりません。校舎は非常に素晴らしい校舎でした。北側に2階建ての鉄筋コンクリートがありまして、中庭がありまして運動場が、そして東側から南側にかけて瓦葺の校舎でした。学校の周辺は、現在の北側ですけども、それから後ろ側は松林で、非常に緑豊かな地域でした。そして特に浦添中学校の運動場にですね、向こうも松林がかなり生えていたんですけどもね、大人が二名ぐらいで巻ききれんかなーと思うほどの大きな二本松がありました。非常に環境に恵まれた学校でした。

当時の前田の、浦添全体そうだったんじゃないかなーと思うんですけど、戦前の浦添小学校地域はのどかな農村地域で、各家庭の屋敷の周囲は緑に囲まれ、広葉樹でしたけども、そして家屋はほとんどが茅葺、そして中には、お金持ちの家庭は赤瓦のと

石川仁栄さんの話

ころもありましたけども、屋敷内には馬小屋だとか牛小屋、そして豚小屋、こういうものがありまして、家畜を飼って農業を営み、そして稲作だとかイモ、野菜を作って、ほとんどの家庭が自給自足の生活をしていました。また森は青々とした松林が多く、緑豊かな自然環境に非常に恵まれた地域でした。経済的には豊かでは決してございませんでしたけれど、精神的な非常に心豊かな生活を送っていただろうと思います。村人は常に助け合う、いわゆるゆいまーるの心を非常に大切にしており、先輩を尊敬する地域社会で、昼夜問わず、子供であれ大人であれ、出会うと自然に笑顔で明るくあいさつを交わす、非常に平和な村でした。

ご存知のように 1944 年、昭和 19 年ですけども、その時に浦添小学校は日本軍の兵舎として利用されるようになりまして、子供たちは各部落の民家を借りて勉強するようになりました。けれども、ほとんど、2 か月ぐらいだったんじゃないかなーと思うんですけど、その程度しか続きませんでした。もうそのころからアメリカ軍の空襲が頻繁に行われるようになりまして、授業が始まったかなーと思ったら米軍機より空襲が始まって、そこから子供たちはあわてて各自で家路に帰ったり、あるいは防空壕に逃げ込むような毎日で、そういったところで危険のために、みんな仮教室に通うことはできなくなりました。

最初に 10・10 空襲を経験することになるんですけどね、昭和 19 年の 10 月 10 日になりますけど、午前 8 時ごろから午後 4 時ごろまで、一日中米軍機による空襲が行われまして、ご承知のように、那覇の市街地の全部が焼け野原と化したわけでございます。10・10 空襲の時には、空襲警報のサイレンが鳴るときにはすでに米軍機はですね、ものすごく轟音を立てて、たくさんの飛行機が上空を旋回しながらですね、ちょうど浦添からは旋回して行って、那覇に爆弾を投下した、というような状況だったと思います。

日本軍は、音は聞こえましたがね、高射砲ですか、それで機関銃で反撃しておりましたがね、ほとんど効果は無かったような感じが致しました。その時私たち家族はですね、家族全員おりましたがね、突然の空襲で、そして非常にものすごい数の飛行機が飛んだわけですから怖くてですね、おびえて、初めて、ぶるぶる震えて、震えるというのは本当に身体全体が止めることができないわけです。歯もがくがくしま

石川仁栄さんの話

して、ずっと一家ガジュマルの木の下に隠れていましたけど、そして12時ごろやっと飛行機の数が少なくなったので、やっと防空壕に逃げ込みましたけどもね。防空壕といっても、先祖代々から伝わってきておりますのお墓ですね、その中を利用しておりました。

まず我が家の家庭の状況ですけども、そのころ父は防衛隊にとられました。叔父は現地召集で兵隊に招集されまして、そして叔母は兵隊の炊事婦として招集されておりました。そして祖父母と母、われわれ兄弟のちょうど5名でしたけどね、そしておじさんの妻子、全体合わせて14名でしたけどね、そのうちこの大戦で犠牲になったのは7名です。

そして先ほども触れましたけども、昭和19年の何月ごろだったかは定かではなかったですけど、学校は日本軍が駐屯しておりましたので、そういう公共施設にも収容できない状況でしたので、民家も軍隊が配置されまして、そして民家の家庭の中に軍隊がいて家族がいて、そして生活を営んでおりました。そして前田の場合、名称で言いますと、ちょうど部落の中心に大きな広場がありまして、そこのそばの畑を敷きならして、毎日、起床ラッパですか、軍隊の、それが聞こえますと軍隊はそこで点呼が行われていましてですね。

話は飛んだりしますけども、10・10空襲が終わりましてしばらくの間はですね、各家庭と防空壕を往復して生活を営んでおりました。昭和20年に入りますとね、日時がたつにつれまして空襲が日増しに激しくなりまして、壕での生活となりました。その時からですね、日中は外に全然出ることができませんでした。午後5時ごろになりますと、飛行機が飛ばなくなるんですよ。その時に炊き出しをして、その日その日の繰り返しの生活をしておりましたけどね。日本軍と違いまして、米軍の場合は何か勤務体制のようでしたよ。ちょうど午前8時から午後5時になりますと、そこまで戦争は飛行機が飛ばなくなるんですよ。でもその代り、艦砲射撃だとか砲撃はどんどん来ます。

それから4月1日ですね、ご承知のように沖縄に上陸するわけではありますがですけども、北谷、嘉手納、読谷近辺あたりに上陸しておりますけども、そして4月下旬ごろになりますとね、浦添城跡の北側一面にですね、夕方でありましたけども、非常にものす

石川仁栄さんの話

ごい火柱がたったんですよ。今から考えますと、最近ハクソーリッジと言う映画がございましたよね、あれから推して考えた場合には艦砲射撃だったんじゃないかと思えますけども、もう空、本当に城址のこの長さ一面、北側からものすごい火柱がたっているんですよ。しばらく見ていたんですけどもね、それが自分に何か覆いかぶさってくる気を感じたんですよ。それから慌てて壕の中に飛び込んだんですけどね。そういったこともありましたけどね。

それからまたしばらくしましてある日のことですけどね、朝早くものすごい騒音を立てましてね、ドドドドーとしてもものすごいまだ経験したことないような地響きを立てながらやってきたのが、恐らく戦車が10台くらい続いていたんじゃないかと思えますけども、その時にはもう、お墓でしたけども、土埃も落ちてくるわけですよ。そしたら生き埋めになるのかなーということで、それも非常に心配でしたけども、外には出ることができないわけですよ。それで我慢しておりましたけども、10時くらいになりまして、戦車が周って来て、今度は戦車から火炎放射機を浴びまして、ものすごい火あぶりです。もうここで終わりかなーと思っていたんですけども、ちょうどお墓の前には雨戸を立てまして、その上には木の枝を折ってきて被せてあったんですけども、それも全部燃えてもうお墓の中にまで火が入ってくるんですよ。そしたら外に出られないもんですから、壕の中に肥やし桶がありまして、その中に小便なんかをしていたんですけども、それに布団をつけまして、布団を広げて火を防いでおりまして、そしてものすごく蒸し焼きになるくらいですから、中ではクバコージですか、あれで一生懸命扇ぎながらその場を凌ぎましたけども。そしてようやく5時過ぎ、火も全部止んでおりまして、焼けるものは焼けてしまって、外に出てみましたらね、非常に松林で、僕らが入っているところは、飛行機が飛んでいても見えなかったんですよ、ものすごい松林が生い茂って、それが全部焼けてしまって、焼け野原になっておりました。だからこの松が焼けるまで、ずっと火あぶりの状態だったんだな、と後で思いましたけども。そしてこれではもうここではどうしようもないということで、とうとう南部のほうに避難しようということになりまして、そしてうちの祖父は当時、若いときから牛のバクヨウをしていたようです。だから中南部のほうに牛の買い付けに行くもんですから、知り合いが多かったそうです。知り合いがいるから、そこに一緒に避

難しようねー、行こうねーということで。ちょうどお墓が2か所あったんですよ。浦添小学校の運動場の東側になっているところ、そこから北側50メートルくらい離れたところ、2か所にあったんですけども、北側の方は道路に非常に近かったものですから、それで危ないからーということで、南側に、浦添小学校側のお墓に入っていたんですけども。そして祖父が向こうに避難準備するために荷物を取ってくるからということで取りに行ったら、帰って来ないんですよ。そして待っても帰って来ないもんだから、うちの兄が、長男ですけど、呼びに行ったんですよ。呼びに行ったら祖父は殺されていました。銃声は聞こえませんでしたから、何か別の方法で殺されていたんだと思いますけど、殺されていた、ということで飛んで帰ってきたんですよ。身内で初めて死者が出たわけですから、みんなびっくりしてショックを受けましてですね、そのまま完全に日が暮れるまで壕の中に入っておりましてですね、日が暮れましたら僕らだけで南部のほうに避難しようねということで行きましたらね、そしたら50メートルくらい行きましたら、もう集落の中には米軍が入っていたと思います、照明弾がボンボン上がるわけですよ。照明弾と言うのはですね、真昼の太陽みたいに明るくなりますからね。その中をかくれながら首里を向いて逃げたわけですけどね。ちょうど国際センターのところ、終戦後に見たんですけど、逃げる途中にもものすごい機銃掃射を受けたわけですよ。もうこれ防ぎようがないな、ということで、でも命拾いましたけどね。戦後帰ってきましたら、あの国際センターの宿舎の道路のところに、戦車が2,3台やっぱり破壊されてましたね。この戦車からあの時機銃掃射を受けたんだな、とその時思いましたけども。

そしてそれから南風原に野戦病院あたりにたどりついたんですけどもね、大きな壕でしたので、安心してそこに入るかなーということにしたんですけどね、そこに城岳生らしい方がですね、ここは非常に危険で、南部に僕らも避難するところであるということをごげられて、じゃあ大変だということで、僕らもそこを去るようになりました。

昼は隠れて、夜しか行動できませんので、ある日の夜でしたけども、移動中は、日本軍は隊列を組んで戦地に向かうわけですよ、夜。その時に、うちは家族が軍隊2名いますのでおじさん達が、母親がおじさん達がいなかうか、強く見なさいよーと

石川仁栄さんの話

言っておりましたけども、その時には艦砲射撃がどんどん飛んでくるものですからね、そこで、軍隊は戦地に向かう、民間は南に向かう、そこに艦砲射撃がどんどん落ちるものですから、夜は暗いし、落ちるとみんなアリの巣に何か投げ込んだみたいになるわけですよ、もう散りばってしまうわけですよ。でもそこで、死んだのか吹き飛ばされたのか分からないわけですよ。そしたら、5年くらいの男の子とですね、首里の子供だったんですけど、それと4歳くらいですかね、幼稚園生か上がって小学校1年生くらいの女の子だったんですけど、「お母さんよー」してとても泣き叫んでいるわけですよ。そしたら、多分もうそこで亡くなられたんじゃないかと思うんですけど、うちの母親が、「もうじゃあ、うちと一緒に避難しよう」って言って連れて、南の方に行きましたけどね。

それでたどりついたのが、国吉か、真栄里、あの近辺ですけどね、そしたらちょうどあの畑の中の一軒家ぐらいでしたけど、そこにたどりついたら、母屋は兵隊さんが入っているわけですよ、戦前の農家は全部家畜小屋があるわけですからね、家畜小屋があったので、そこに僕らは入りました。そのうちにどんどん家畜小屋にいっぱいになりまして。夜が明けるとものすごい砲撃にあいましてね、何か米軍の場合には明日そこに上陸するぞーというときには、ものすごい砲撃を行うんですね。そこでもうみんな身を縮めて、もちろん飯なんか水もないわけですよ。そこで1日中我慢して、午後5時ごろになりましたら、その一緒に連れていた兄弟がですね、初めて身内のように感じたんですけども、お兄さんの胸にしがみつくようにして、みんなこう兄弟しがみついていたんですけども、しがみつくようにしてもたれて、そのまま亡くなっていましたけどもね。これもあれですよ。砲撃が止んで初めて死んだということがわかるわけですよ。そしたらうちのおばさんがですね、「平和の世の中になったらね、遺骨を拾いに来なさいね、一番わかりやすいところに、この屋敷の隣の畑の角に埋葬してあげて、よく覚えておきなさいよー」ということでやったんですけども。またその翌日ですね、ものすごい朝からまた砲撃にあいましてね、僕らが入っている動物小屋もたぶん吹き飛んだんじゃないかなーと思うんですけどね、いっぱい入っていた人もどうなったのか全然わかりません。その時にちょうど私は、自分の弟でしたけども、4歳になる弟、私がずっとおんぶして南まで連れて避難していたんですけど、こ

うして膝を抱っこするようにして、そして私の前に弟は座っていたんですけども、そしたら破片が、私は右肩から右足膝までですね、ずっとえぐられて、そして前にいた弟の脇腹をグサッとけずられてですね、まあ、もうそしたら、その晩、その時に私はとっさ的に1,2メートルくらい入口の方に押しやられていたんで、1,2メートルくらいは何かとっさ的に動いて倒れていたんですけどもね、そこに私の母親が、私の前にちょうどおばさんが、後ろのこのくらい、背中に穴が開いているようでしたけどね、私の上に倒れようとしているものを、「子供が怪我してますよー」と言う風なことを言ったら、何かその前のほうに、これちょっとおぼろげながら覚えていますけども、前のほうに倒れて、そのままでしたけども。人間死ぬ瞬間まで何か意識あるのかなーと言うのを、今だからこそ感じておりますけどね。

そして怪我をしますとね、ものすごい高熱が出るんですよ。私もものすごい高熱が起きて、弟と二人ものすごい熱におかされまして、包帯もないですからね、ただこういったところを縛るだけですからね、そしたらものすごく水がほしいわけですよ。水をくれと言っても、「水ー、水ー」と言っても水をくれないわけですよ、親が。何かこういった話聞きまして、怪我をしている人に水を与えると、出血がひどくなるんだ、と言うことで、本当か迷信か知らないですけど、そういったことがあって水もくれないくてですね、意識朦朧としていましたけども。

その翌日、偶然にもですね、うちの父親が探し当ててありまして、もうこれ本当に偶然ですけどね。そして弟と私、農家はちょうどモッコというんですか、荷物を入れて、これに僕ら二人を入れて担いで南の方に移動したんですけども、そしたらもう入るところも何もないもんですから、ちょうど松林みたいなところがありましてですね、ちょうど岩みたいなものがあるところに、一家とにかくそのほうに隠れていたわけです。そしたらこの時のもう、何か狙われているような感じでものすごい砲撃にあいましてですね。私はもう怪我をしているもんですから、おばさんがたぶんモモ枕か何かさしていたんじゃないかと思うんですけどね、そしたら何か、弾が飛んできておばさんはですね、頭から首から上全部吹っ飛んで無くなっていました。目を開けてみたらですね、血が噴き出しているもんですから。それからあの、父方が石をちょっと置いて、仮村葬みたいなことして、そのまま南の方に逃げましたけどもね。

石川仁栄さんの話

そしたら何にも、壕らしい壕に入るところがないもんですから、ちょうど畑の中に溝があったんですよ。ウージ畑でしたけど。戦前はキビの残骸を枯れたやつを、燃料にするために1か所に積んで置いてあったわけですね。そしたらそれを父親が溝のほうに上からかぶせて、そこに隠れていたわけですよ。そしたら、翌朝になったら、米軍がたくさん周囲に集まっているわけですね。そしたら幸いにも2世が、銃口を向けてきて、あの、子供が泣いたんですよ、泣いたもんだから、銃口向けてきて、あー民間か、今は入っておきなさい、今は交戦中だから、今は出れないから、あとで呼びに来るから、ということでですね、そして助かりましたけど。その時に、もう人間は、ちょうど親戚のおじさん家庭と僕ら家庭の2か所、一緒に隠れていたわけですけどね、そこで手榴弾を1個ずつ持っているわけですよ。そしたら周囲に米軍がたくさんいるわけだから、殺されるのか、もう殺されるしか考えていないわけですね。そしたら、もう家族の人数を手榴弾持って殺して死のうということで二人やっているわけですよ。その時の状況じゃないとわからないですけど。そしたら妻たちがみんなで止めてですね、行かさなかったわけですよ。だから自分が死ぬのか生きるのか、その時の状況じゃないとわからないわけですよ。息止めて幸いにも命拾いして、そのまま捕虜になりましたけど。

忌まわしい状況の説明と言うのは、ちょっと非常に辛くてしづらいですね。私怪我しましたけど、自然に治るまで病院には行きませんでした。行けなかったんです。ちょうど捕虜にとられてから、僕ら山原のほうに収容されましたけど、そこは食料もあんまり行き届かないし、病院もあったのかなかったのかわかりませんが、ずっと自然に治るまで。だから戦争はもう2度とあってはならないなど。絶対にいいと思いますね。平和な世の中が一番大切だと。戦争での犠牲者は20代の若者ですよ。いわゆる兵隊と言うのは。そういった20代の若者には、いろんな将来の夢や希望もあるよこれからは、こういう人もできたんであらうと思うんですけど、そういった若者がたくさん死んだわけですよ。青春はいわゆる戦争に奪われてしまいますし、多く犠牲になるのは子供、お年寄り、女性ですよ。だから戦争はもう2度とあっちゃいけないと思います。平和な世の中を願ひまして、戦争体験をですね、後世のた

めに継承してくださいますように、特に皆さんの方をお願いして申し上げたいと思います。下手なお話で申し訳ございませんでした。

非常に戦争と言うのはつらいんですけども、まずこうしてみなさん揃っていますよね、そうするといつ何時弾が落ちるか分からないわけですよ。場合によっては全部吹っ飛んで死んでしまいますしね、生き残る人は身体が散り散りバラバラになるし、足が切られたり、もうそこには本当に、説明のしようがないですね、血が散らばるし肉が散らばるし。だからそれは、あの現場で見た光景と言うものはですね、表現できませんね。身内が、私の弟でも、怪我したんですけどね、やっぱり何か避難している途中もたくさん死人だとか、怪我をしている人だとか、「水をちょうだい」「水をくれ」だとか、足がなかったり、いろんな人がいますけどね、その人に何も感じませんでしたけどね、けれども身内が、今なるとあれが思い浮かぶんですね。これはもうとっても辛いですね。当時はそんなに強烈には感じませんでしたけどね。飯も食べない、水も与えることができない、だけどやせ細って、目は、ものは言えないわけですよ、目はパッチリと開けては閉じするけども、特にあの、息がピーピーして出よったんですよ。撃たれた後はカンパチになって、治療は全然受けなくて、自然に治るまで。前に抱いていた弟は亡くなったわけです。私が盾になっているわけですけども。

5月上旬くらいまでは浦添にいたんだと思います。

地域にいるときはそんなことはありませんでしたけどね、沖縄の人が生き残っているのは先祖のおかげだと思っています。大和の墓は隠れることできませんよね。沖縄の墓は防空壕に変わったわけですよ。だから全部そこにみんな隠れたわけですよ、それで命拾いすることができたと思います。でも犠牲の数からすると、前田あたりでも50パーセント以上ですからね、犠牲になったのは。南部に避難する道中に、入っていたら日本軍が来て、もうみんな自分たちが生きるのに精いっぱいですからね。入っていたら日本軍が来て出なさいと、出なかったら銃弾撃ちこむぞ、と言われてましてね、そうすると出らざるを得ないわけですよ。弾はボンボン落ちますけどね。その経験は南部に避難した方々は経験されているんじゃないかと思いますね。僕らも1回あります。

石川仁栄さんの話

僕らが帰った時には、一面全部、今は前田あたりでも緑豊かですよ、全部、屋敷も全部消失してしまったわけですよ。その時には、屋敷中の木も畑も草も全部、畑を耕したみたいでした、弾も落ちて、何の木もないですよ。僕らはあの、ここは小学校周囲はですね、仲間の自治会を含めて、周囲は金網で囲ってですね、浦添村民はそこに収容されていたわけですけどね、食べるのはあまり満足にないものですから、金網の中から自分の部落に逃げ込んでですね、やっぱり畑にキビなんかあったんですよ、あるいは軍隊の缶詰を探したりですね、そういったことで探して歩きましたよ。いたるところに兵隊の死体なんかが多かったですけどね。ハクソーリッジの映画に縄の梯子がありましたよね。あれは戦後までありましたので、あれにはぶら下がって遊びましたよ。城址の近辺はですね、兵隊の死んだままそのままだの姿で全部ありましたからね。だから岩にもたれて死んだ方はですね、ミイラ化してましたよ。地面に倒れている方は全部白骨化していましたね。ちょうど今、今この地域ですね。小学校から南側は今住宅地域ありますよね。森になって少し低くなって、そこ前は畑でしたけどね。小学校の時、学校からこの近辺、芋、食べるものないですから、先生方に連れられて畑耕して芋を植えようということで、その時は白骨だとか、手榴弾だとか、戦争で日本軍が使ったものだとかはたくさん出ましたよ。でもその中を歩いてきましたからね、先生も子供も、怖くはないんですよ、手榴弾が出ても砲弾が出ても、片付けるだけで。

戦車の残骸は、たぶん、朝鮮戦争の時に、鉄類等類、相当僕らもいろいろ集めましたからね、薬きょうなんかも。商売人がいたので売ったりして、あの時分じゃないですかね。スクラップブームの時に回収されたんじゃないかと思いますよ。前田には少なくとも4台ありました。

【付記】

聞き取り内容の書き起こしを記載

【記入期日】

2018年1月30日（火）

【記入者】崎枝

玻名城 初江さん 取材

2017 年 11 月 22 日 10 時～12 時 浦添市安波茶

体験者 玻名城 初江 85 才(当時 12 才仲間在)

取材者 山崎

戦時中は浦添城クチグワーガマに避難 3 月～5 月 5 日 までの証言です。

父、兄は防衛隊として出兵し、家族(祖母、母、初江、妹、弟)5 人が残りました。疎開の話がありましたが、その時対馬丸が沈められたことを聞き行くのをやめました。

1945 年 3 月頃、爆撃が激しくなってきたので家族は、クチグワーガマに逃げ込み約 2 ヶ月間くらいガマの中にいました。ガマには、10 家族ほどいました。砲爆撃でガマの中は爆音と震動で生きた心地がしませんでした。入口付近の天井には爆撃で人の肉片がこびりついていて怖かったことを思い出します。海を見たら真っ黒になるほどの艦船が浮かんでいて 1400 隻ほどいたと後で聞きました。爆撃が収まり皆んなが少しずつ出て行った。最後に玻名城さん家族が 5 月 5 日 にガマを出ました。周辺に数多くの兵隊、住民、子供の死体がたくさん転がっていて、まさに地獄でした。

南部方面へ向かったところでアメリカ兵に見つかり捕まりました。その時『殺される』と思いましたが水、食糧をもらえて安心しました。その頃には浦添地区の戦争は終わっていました。その後は大山の収容所に連れていかれたテント生活、コザ収容所と移動そこで終戦を迎えました。

1946 年 6 月 1 日解放され仲間部落に戻りましたがそこは焼け野原で何も有りませんせした。その後もマラリアがまんえんして大変でした。

父は戦死、遺骨は無く、兄は、無事帰還
家族 5 人は、アメリカ軍に捕まったことで死ぬことは有りませでした。

現在は、平和活動の一環として主に浦添の学校などを中心に体験者として



お話をされているそうです。

石川幸助さんの話

【特定した期日】

3月6日（防衛隊に招集された）

4月27日頃

4月30日、5月1日

5月26日

【特定した場所】

- ・西新城
- ・ウカンジャ森
- ・前上門の墓
- ・志禮の墓
- ・野嵩の収容所
- ・コザ孤児院

【体験者名（当時の年齢）】

石川幸助さん（9歳：1935年7月5日生まれ）

【出典】

琉球新報（2017年10月25日（水）24面）

広報うらそえ6月号

【内容】

浦添村前田で生まれ育った石川幸助さん（82）は祖母と両親、3人の弟たちとつましやかですが、平和に暮らしていました。しかし第二次世界大戦が勃発し、1945年3月に父親が防衛隊に招集されて以降は、激戦地となった地元前田の壕を転々と逃げ回りました。家族は次々と米軍の射撃を受け、命を落としていきました。「与えられ

石川幸助さんの話

た命に感謝しないと」と、終戦後はたった一人の家族・母と二人三脚で生活を再建しました。

○石川さんは6人兄弟の二男でしたが、戦前に長男が病死したため、長男の役目を担っていました。1945年当時は浦添国民学校の3年生。戦争が激化する中、父のもとに召集令状が届きます。

父は鹿児島県などで機関銃隊の一員として2年間務め上げ、1945年の2月末ごろに浦添村に戻って来ました。私たち家族は、みんな「これからまたお父さんと一緒に暮らせるね」とたいへん喜んでいましたが、帰任からわずか2,3週間後に父の招集を求める赤紙が届きました。

祖母が「また（父が）兵隊に連れて行かれる」といって、悲しそうに悔しそうに泣いていた姿を、今でもはっきりと覚えています。あの時代は一度兵隊になったら死ぬ覚悟、残された家族も、もう会えないものだと思っていました。そして父は再び兵隊になりました。

私と弟たちは疎開しようか、一度は迷いましたが、一番下の弟・真一が生後8か月でまだ小さかった上、祖母が「船路は危ない」と許さなかったため、家族はみんな沖縄に残ることにしました。

○1945年4月1日、大勢の米兵が北谷や読谷から次々と沖縄本島に上陸しました。見晴らしの良い前田高地は、日本軍の司令部があった首里の防衛線として重要な場所でした。

米軍は容赦なく攻撃を仕掛け、いよいよ浦添にも迫ってきました。地獄の始まりです。私たち家族は、現在の浦添市消防署の近くにある西新城（イリアラグスク）という母の実家裏の防空壕に隠れました。時々、壕の入り口付近で銃の音も聞こえ、本当に怖かったです。数日もすれば食べ物が底をつき、みんなひもじい思いの中おびえながら、ただただ壕の中で米軍がいなくなるのをじっと待っていました。

石川幸助さんの話

前田高地は大変な激戦地で、朝から晩まで艦砲弾が飛び交い、あたり一面の焼け野原にはいたるところに死体がありました。母たちが「これ以上ここにいたらやられる」と言っただので 27 日ごろに壕を出て、首里を目指すことにしました。必死の思いで歩き、ウカンジャ森の頂上付近に着くころ、上の方から米軍が撃った弾が祖母と当時 3 歳の四男善一に直撃し、目の前で即死しました。その後まもなくして三男の三郎（当時 7 歳）も犠牲となりました。

○4 月 30 日、石川さんは首里行を断念し、母、真一さんと前田小学校近くにある遠い親戚の前上門（メージョウ）の墓に身を隠しました。

前上門の墓はすでに人がいっぱいでしたが、一夜を過ごしました。翌 5 月 1 日朝、再び首里を目指し歩いている途中、背中におぶっていた真一のこめかみを迫撃砲の破片が貫通。真一は鳴き声も上げぬまま、私の背中で死にました。一瞬はパニックになりましたが「ここから逃げないと」という一心で、悲しむ余地さえ与えられませんでした。足をけがし、つえをついていた母に「あなた一人だけでも逃げなさい」と念を押され、やむを得ず母とはそこで別れました。

○一人きりになった石川さんは再び前上門の墓に戻ることにしました。孤独に加え、極度の疲労と飢えで体力もほとんど限界でした。

空腹と喉の渇きでまったく体に力が入らないのです。ここに来て 4 日目に雨が降った為、這いつくばるようにしてそこら辺りにあった器などを利用して水をかき集め、泥とごみが混じった雨水を飲みました。4 日間、口にしたのはそれだけです。あまりの空腹から自分の小便も飲もうとしましたが、栄養失調のため量も少なく、どす黒く濁っていました。口に含んだら吐き気がして、結局全部は飲めなかったです。戦争は本当に人の感覚を麻痺させる恐ろしいものだと思いました。

「ここにいたら死んでしまう」と思い、再び西新城に戻ることにしました。

石川幸助さんの話

○西新城の壕の近くにある別の壕を見つけ、中へ入ると、衰弱したタンメエ（おじいさん）とンメエ（おばあさん）との出会いがありました。

動けない 2 人のために急須で泥水をくんで持っていくと、とても喜んでくれました。でも出会いからわずか 10 日間ほどで 2 人はなくなりました。ンメエには生前「死んだら顔に私の着物をかぶせてほしい」とお願いされていました。私は約束を守ろうとしたのですが、着物は何かに引っかかっている、私には十分な力も残っていませんでした。約束を果たせなかったことが今でも本当に心残りです。

○その後、前田部落を作った地元の偉い人のお墓に移動しました。

5 月 26 日、志禮（シリー）の墓と言われる立派な墓に行きつきました。仲は骨壺と死体が入った棺でぎっしり。隙間を見つけて腰を下ろし、外を眺めていました。その時、「ヒューイ」という口笛が鳴ったので、「アメリカ兵に見つかった」と思い、あわてて死体が入った棺の中に身を隠しました。

私は死体の上に覆いかぶさったようで、身動きをすると鈍い音がしました。死体のあばらが潰れた音でした。見つかってしまつては殺されると身を潜めていましたが、一人の米兵が銃剣で棺のふたを開け私を引っ張り出しました。

「殺されるんだ」と思いおびえていると、米兵がポケットからチョコレートを取り出し、自分が食べているところを見せたうえで私に手渡してくれました。それを見て安心した私も食べました。あまりにおいしくて思わず顔がほころぶと、米兵も私を見て笑いました。

○米軍にとらわれて石川さんは野嵩の収容所を経て、沖縄市のコザ孤児院に移送されました。

孤児院には何百人もの子供たちがいましたが、けして暗い感じではなかったように思います。しばらくして生き別れになっていた母が迎えに来てくれました。母は私を見つめるなり「イチチョーテーサヤー（生きていたんだね）」と涙を流し、「これか

石川幸助さんの話

聞いて、「アメリカ兵に見つかってしまった！」と思い、急いで死体が入った棺の中に入っておじいさんの上にかぶさるようにして隠れました。死体のあばら骨がつぶれる音がしました。見つかってしまったては殺されると息を潜めて隠れていましたが、銃剣でふたを開けられ引っ張り出されてしまいました。

棺から出た時には体がじめっとしていました。着物の切れ端やらうじ虫やらが体中に付いていたのを払いました。その様子を見たアメリカ兵もかわいそうだねーと思ったのかもしれないですね。ポケットからチョコレートを出し自分が食べているところを見せて、私に手渡しました。それを見た私は安心してチョコレートを食べました。水も飲ませてもらいました。おいしくて仕方ありませんでした。その後は捕虜となり、死んだと思っていた母とも収容所で再会でき、戦後2人で必死に生きてきました。

【記入期日】2018年1月14日（日）

【記入者】崎枝

石川幸助さんの話

らは良い世の中になるから一緒に頑張ろうね」と頭をなでてくれました。父も捕虜になり胡屋の病院にいと聞き会いに行きましたが、いませんでした。死亡証明書もなく、恐らく戦死したのだらうということでした。

7人いた家族は母と2人だけになりましたが、戦後は支えあいながら一生懸命生きました。戦時中は何度も心が折れそうになりましたが、最後まで生きることをあきらめなくて本当に良かったと今なら言えます。子や孫に、私と同じような経験を絶対にさせたくない。二度と戦争が起こらないように、私たち一人一人が改めて今の平和な社会に感謝をしなければならないと思います。

【付記】広報うらそえ6月号より抜粋

石川幸助さん（81） 当時9歳

戦火から逃れる途中、母がケガをしてしまい「あなただけでも逃げなさい」と言われ、独り前田小学校近くの遠い親戚のお墓に逃げ隠れました。飲食せず1週間、空腹と喉の渇きで、自分の小便や泥水を飲みました。小便は鼻から抜けるアンモニア臭により吐き気がしました。壕を転々としていた時に、んめえ（おばあさん）、たんめえ（おじいさん）と出会いがありました。

動けない2人のためにきゅうすで泥水を汲んで持っていくととても喜んでくれました。出会ってから1週間の内に2人とも亡くなり、しばらく経つとうじ虫や銀バエが湧いていました。

「私が死んだら顔に私の着物をかぶせてほしい」と、生前んめえと交わした約束を果たすため、私は着物をかぶせようとしたのですが、何かに引っかかりかぶせることができず、約束を果たせなかったのが今でも心残りです。

その場を後にして他に隠れる壕を探しました。前田部落を作った方の墓に行き着きました。中は骨壺と死体が入った棺でぎっしり。入り口からちょっと入ったところに座って「平和だったら、青々と生い茂った草木を刈って、ウサギやヤギにエサやりができたのになー」と思いつつ外を眺めていました。その時、「ヒューイ！」という口笛が鳴ったのを

富本祐徳さんの話

【特定した期日】

4月28日

5月上旬

【特定した場所】

前田トンネル付近のお墓

【体験者名（当時の年齢）】

富本祐徳さん（12歳）

【出典】

沖縄戦新聞－沖縄戦60年（琉球新報社、2006年2月発行）

【内容】

日本軍の防御線・浦添村牧港、伊祖を突破した米軍は4月26日、前田高地の総攻撃を開始した。浦添村前田の富本祐徳さんは、米軍総攻撃の数日前まで前田、仲間両集落の間で、避難用の壕掘りを急いでいた。しかし「軍が使用するから出ていけ」と日本軍に追い出される。仕方なく家族5人を含め、近所の住民と墓の中に逃げ込まざるを得なかった。

富本さんらが避難した墓は2m四方もない広さで、高さもない。足を縮め、座った状態で身を潜める。昼夜問わず墓の中で暮らしていたため外の様子がわからない。墓に避難してから数日後、意を決して外に出た。あたりは砲爆撃の跡だらけ。兵舎として使われていた一般家屋は跡形もなく、遺体が転がっていた。

「ここにいたら助からない」富本さんら10人は4月28日頃、夜道を首里へと急ぐ。しかし目的地に全員が入れる逃げ場はない。「どうせ死ぬなら生まれた場所で死のう」。明け方までに、全員で元いた墓へ戻った。

集落内の焼け焦げた畑には何もなく、食べ物は家畜用に残しておいた畑のキャベツの根っこだけだ。夜それを取り、墓の中でみんなで分けて食べた。死んだ馬を見つけ、

富本祐徳さんの話

肉を切り取り持ち帰ったこともあった。しかし肉は腐敗していたので、腹がすいていても、だれも口にしなかった。

真っ暗で静まり返った墓の中で、富本さんは恐怖心よりも無力感に襲われていた。前田に陣取る日本軍からは「いつでも米軍を総攻撃できる。戦争は当然勝っている」とだけしか知らされていない。それだけに遺体の山を目の当たりにすることは予想していなかった。確かに聞こえる米軍の「足音」。富本さんの父、祐松さん（45）が悟ったように家族に告げた。「敵軍が目の前まで進んでいる。勝っているわけではない」

5月上旬、富本さんらは墓を出て首里以南へ避難することにした。その矢先、約100m先の井戸に水をくみに行った祐松さんが胸を真っ赤にしながら墓の中に倒れこんだ。「クヌ水ヌメーカラ、ムルヒンギレー（この水を飲んだら、みんな、逃げなさい）」。押さえる指の間から血を噴き出しながら父親は最後の力を振り絞って命じた。

ついに父親は動かなくなった。富本さんは恐怖で身動きができなかった。一時間ほどすると重工が墓に向けられた。「デテコーイ、デテコーイ」。片言の日本語で米兵が呼びかけた。しかし「捕虜になれば殺される」と思い、誰も出ていかない。そんな中、年配の女性がゆっくりと外に出た。その後「おいで」とみんなに手招きした。

米軍に保護され墓外に出てみると、戦車3台が行き交い、廃墟となった集落が富本さんの目に飛び込んだ。「村がなくなったが、どうにか死ななかった」と実感した。

【付記】

【記入期日】

2018年1月14日（日）

【記入者】 崎枝

字誌なかま抜粋(宮城茂雄さん/宮城義信さん/照喜名重信さん)

【特定した期日】

3月23日～3月下旬

4月28日頃

5月4日、5日、6日ごろ

【特定した場所】

- ・シーマヌヤマの壕
- ・上与那覇小（仲間 2-37-3）
- ・照喜名（仲間 2-37-2）
- ・亀与那覇小の東の壕（亀与那覇小：仲間 2-36-8）
- ・浦和の塔
- ・ワカリジー
- ・武太与那覇小（仲間 1-26-10）
- ・仲新門小の東の壕（仲新門小：仲間 2-39-7）

【体験者名（当時の年齢）】

宮城茂雄（17歳、昭和3年生）

宮城義信（15歳、昭和5年生）

照喜名重信（30歳、大正4年生）

【出典】

字誌なかま

【内容】

宮城茂雄さんは、3月23日から空襲が始まったので、3月下旬ごろよりシーマヌヤマの壕に入ったと記憶している。その時には兵隊もすでに入っていた。その兵隊は50人くらいの小隊で、嘉数から来た石部隊。小隊長は支那事変帰りで、日が暮れると毎日連れ立って銃や機関銃を持って出て行った。シーマヌヤマの壕には、仲間の部落の

字誌なかま抜粋(宮城茂雄さん/宮城義信さん/照喜名重信さん)

人以外にも、屋富祖の人も那覇の人も入っていたため、100人ぐらいいた。入り口の右側に兵隊が炊事するところがあり、住民も使わせてもらえた。

義信さんの父は、上与那覇小と、照喜名さんの家の境にいたところに、足首をやられた。照喜名さんは亀与那覇小の東の壕にいて、その壕と家を往復して食事を作っていた。照喜名さんが、義信さんの父をシーマヌヤマに届けた(4月24日～28日頃)。義信さんの父は、壕に届けられた4,5日後に亡くなり、その後に壕が落盤した(義信さんの父が届けられて約1週間後、5月4日)。

壕に入っていた人の3分の2くらいは兵隊で、そのうち30人くらいが負傷兵だった。落盤した後に元気な兵隊たちは、俺達が出てからお前たちは出ろ、と住民に言い残して出て行った。茂雄さん達は奥のほうで長いことうずくまっていた。兵隊たちは日が暮れて脱出しているが、茂雄さん達が出るころには薄明るくなっていた(5月5日)。昼間は行動できないので結局日が暮れて出ようということになり、日が暮れて出たが、浦和の塔の近くで負傷した。城跡にあがって、ワカリジーのところに出て前田に降り、水を腹いっぱい飲んだらもういつ死んでもいいという心境になっていた。

宮城義信さんは、茂雄さん達とは別に壕を出た。壕を出て武太与那覇小の良栄さんの家のところに来たら、アメリカや戦車がいっぱいだったので引返した。仲新門小の実行さん達の家東の壕に一晩いて、そこで逃げる相談をした。宇佐小湾小の家の後ろの大きな木のところで義信さんも怪我をしてしまったので、一緒に逃げていた無傷の人たちはもとのところに戻った。一緒に足をやられた新栗国小の豊子と気を失って倒れていたが、気が付いて這って自分の家の壕に帰った。翌日にナーカのオーバーが来たので一緒に安波茶まで行った。イリジョーシチ(西門敷)の西側の通りでアメリカにあったが、あっちに行きなさいと言って何もしなかった(5月4日～6日頃?)。

【記入期日】

2018年1月14日(日)

【記入者】崎枝

字誌なかま（又吉初子さん）

【特定した期日】

- ・米軍の上陸1か月前の様子
- ・4月7日、仲間一帯が非常事態になって軍からの立ち退き命令
- ・米軍が浦添小学校付近まで来たとき
- ・5月2日から5月6日

【特定した場所】

- ・大工樋川小（又吉初子さんの家：仲間 2-34-9）
- ・川ヌ上栗国小（又吉さんの家の後ろの家）
- ・ムラヤー（現在の自治会館）
- ・蒲又吉の壕（蒲又吉：仲間 2-34-2）
- ・亀与那覇小の東の壕（亀与那覇小：仲間 2-36-8）
- ・三男与那覇小（仲間 2-43-11）
- ・4班の壕

【体験者名（当時の年齢）】

又吉初子（34歳、明治44年生）

【出典】

字誌なかま

【内容】

○米軍が上陸する前の様子

アメリカ軍が上陸する前は、仲間には日本兵が警備とってたくさんいた。部落の大きい家を借りてそこに住んでいた。私の家の後のカーヌウイーアグングワーは、家族はみんな家を追い出されて馬小屋に住んでいた。

字誌なかま（又吉初子さん）

ムラヤーは慰安所（ジュリヌヤー）になっていて、朝鮮人慰安婦（朝鮮ピーとよばれていた）が11人ほどいた。そこはいくつかの部屋に区切られていて今日は石部隊、明日は球部隊というふうに兵隊たちが2,30人ずつ並んでいた。慰安婦たちには日本人のオヤジが一人ついていて、今の自治会館のとなりの家を借りて住んでいた。私はそのころ、商売をしていたので、バナナや鶏をオヤジに売っていた。オヤジはそれを、朝鮮人慰安婦に売っていたようだ。

空襲が始まると銘苅雅康さんが「空襲警報」と言って鐘をたたいてまわっていた。そしたらみんなはね、砂糖とデンプン（イモの）を持ってガマに隠れた。

仲間にはガマ（避難壕）が、シーマヌヤマとかクチグワーガマとか、4班の壕、6班の壕とかいうのがあったけど、その他にも小さいのがあった。特に班ごとに決まっていたわけではない。ちょうど親戚の人が入っていたら、そこに入りなさいという具合で、特に決まっていなかった。私たちの隣にはカマー又吉の壕があり、そこに入ろうかとも思ったが、そこはすでに人が入っていた。だから、亀与那覇小（カミーユナファグワー）の東（アガリ）の壕に入った。この壕は大きくて三男与那覇小までつないでいるらしい。避難といっても空襲警報が鳴ったら壕に入り、終わったらまた家に帰る。だから壕から出たり入ったり、これが一か月くらい続いた。

主人は、南洋に行っていましたから、男手は全然ない。だけど私が若かったからやっていたのでしょうね。

私は娘の春子（当時8歳）を連れていた。おばあさんは長男の敏雄をつれて島尻に行っていた。兵隊さんが、こっちからは逃げた方がいいよ、と言った（4月7日の立ち退き命令？）ので、私もジナンアグングワー（次男栗国小）のオカーが、ウチナーは大変だから疎開しようと言っていたが、戦はどこも同じだし、自分のシマで死んだ方がいいと思って行かなかったんです。私はそれで仲間にとどまって戦闘が激しくなってから首里に逃げた。だけど、首里ではどのガマもいっぱいであつた仲間に戻ってきた。4班の壕には、ナーカシムジョー（仲下門）、上又吉の家族、仲西の照喜名のウフオバーサン（当時94歳）、カミヤージ（亀屋宜）他40人くらい入っていた。だけ

ど壕は暗くて、中に入っていくにしたがって低くなるし、みんな怖がっておくには行かなかった。だからみんなひとところに集まっていた。

○米軍の上陸→シーマヌヤマへ

いよいよ敵が近くの浦添小学校の入り口までやってきた。もう、ここには（4班の壕）にはいられないので、グスク（シーマヌヤマ）にちゃーぶんーない（一目散）して逃げた。

そのときは、私は宇佐小湾小（ウサークワングワー）のおばあさんと照喜名のおばあさんに、ローソクの火で、油みそを入れてジューシーメーをたいてさしあげた。このジューシーメー（雑炊）をうさがみそーれー、兄さんたちが迎えに来るまでどこにも行かないでね、と言って。おばあさんたちはお年寄りだし、逃げられなかったから。それで、この壕を出たのが5月の2日です。

シーマヌヤマには5月2日から、捕虜になるまでの5月6日までいた。壕の左側には兵隊が、右側には避難民がいた。

食糧は、島尻に逃げた人が残していったのでたくさんあった。油みそとか砂糖とか。でも水がないからのどが渇く。だから油みそなんか食べられない。水は、岩間から垂れるのをハンカチにすわしてこれをしゃぶったり、自分のオシッコを飲んだりした。壕の中でね、いろんなことがあった。

○日本軍による乳児虐殺

ある人の赤ちゃんがあんまり泣くもんだから、友軍の兵隊が、この赤ちゃんの声は電波から聞くから（電波にとらわれてしまうから）、2時間くらい寝かす薬があるからといって連れて行った。返してくれた時には、もう動かなくなって…。そしたら母親の頭がおかしくなってしまった。

○足を挟まれた一等兵の例

字誌なかま（又吉初子さん）

オーナトグワー（玉城村奥武島）出身の仲本亀一郎一等兵は、落盤したときに両足を挟まれてしまった。この手を引っ張ってくれと言うからみんなで引っ張ったら、アガー、アガーと言って叫んだ。とても苦しそうで、その人にうちの春子は、布に水を浸して、5,6回水を飲ましてやったよ。でも結局その人は、「私は手榴弾を持っているから皆さんは岩陰に隠れてください」と言って、手榴弾で死んでしまった。その人の話によると、あさって兵隊に行くという日に子供が生まれたと言っていました。誕生日と言っていたのかははっきりしませんが。

○落盤、ガマからの脱出、5月6日ごろ

ギリギリギリと音がしたかと思うとガマの入り口が壊れてふさがれた。その時は兵隊は誰もいないから、水筒を探してきて、それで入口の石を割った。頭が出るくらい穴があいたら、出られるからと言ってみんなで割りましたよ。

穴が開いたらみんなでジュークーエー（みんなが前の人の足をつかまえてつながって）して外に出た。ミーヒジャグワーのナビーおばさん（屋富祖）が最後だったけど出ると同時に亡くなりました。下痢をしていて体力も弱っていましたから、最後の力を振り絞って出たのでしょう。

○捕虜に

壕の外に出る前に、ハワイ帰りの知名明さん（屋富祖出身）という人がいたので、その方は英語が話せるので、アメリカ人と話をした。それで捕虜になった。

そこで捕虜になったのは17名です。この中には屋富祖の人なんかも混じっているわけですが。仲間の人は、三男知名小（サンナンチナグワー）のオカーとヨシちゃん、次男下門小（ジナンスムジョーグワー）のおばあさんとか。ヌンドウンチグワーの親子は、前の日に壕を出ようとして、三男はまだ小さくて、オンブされていたが壕の入り口ですぐやられてしまった。また、東屋宜（アガリヤージ）の親子、蒲知名小（カマ

チナーグラー）のグジャーお婆さんの母親もその前にやられて亡くなっています。後小湾（クシクワン）のオジーはユウドレ入り口で亡くなったと聞いています。

壕から出るとアメリカーがだいたい40人くらいいた。私たちは、知名明さんを先頭にしてその明さんが英語で通訳をして、先に進みました。壕の外の状態といえば、死体がならべられていてシーツをかぶせてある。これはアメリカーなんだね、頭だけ出ている。日本の兵隊はあっちこっちに倒れているわけ。私たちは、オーバー（ハエ）が目にはブーブー飛んでくるもんだから、グムルの葉で追っ払いながら歩いた。

また、米兵は、ケチャップの入った豆の缶詰があるでしょう、あれを食べろという。うちの春子は、あれは赤いから毒が入っている。これを食べたら死ぬと手まねで言った。そしたらアメリカーはスプーンを持ってきて食べて見せたわけ。それで毒は入っていないことがわかったから、みんなおなかをすかしているし急いで食べた。水缶の水も手まねであけてちょうだいと言ったら、あけてくれた。

それで私たちはユウドレの坂を降りて、当山から車に乗せられていった。その時の運転手はクロンボー（黒人）であった。連れて行かれたのが太山の浜。そこにはすでにテントが張られていたが人はまだいなかった。私たちがはじめてでした。

○コザの収容所へ

コザの収容所には一年くらいいました。そこでもいろんなことがあった。武太与那覇小（ンターユナファグラー）のオジーとオーバーの手足が大きくはれていたので巡査が伝染してはいけないと別棟にうつした。そして親戚がいなければ、仲間の人が誰でもよいからめんどくさくするように言われた。

私は元気だし、私はイモがあったので米は、オジーオーバーにウケーメー（おかゆ）をたいて食べさせた。でも、そうこうしているうちに15日目くらいにオジーがなくなった。オジーをタンカにのせて仲栗国小（ナーカアグングラー）のオーバーと二人でタンカを担いでカマーラ（嘉間良）まで運んだ。ずいぶんの距離で、10回くらい休みました。カマーラには、井戸のように口が開いている深い穴があってそこに葬りました。

字誌なかま（又吉初子さん）

一週間したらオーバーも亡くなったので、また同じようにして運びました。オーバーはなくなる前に、「あんたは嫡子は産んだか」と聞いていた。「うん、うちは長男は産んでいますよ」と言ったら、「トー、そうしたら私がミーマンティ（見守って）、次男を産ませてやるから」と、言っていました。

収容所から仲間に戻ってきたとき、遺骨ひろいがあったでしょう。私はカシガー袋の二つも集めましたよ。集めた骨はグスクに持って行った。外人の骨は腕も長いし、足も長いからすぐわかりました。今、浦和の塔には5,000体くらいがまつられているそうですよ。

【記入期日】

2018年1月14日（日）

【記入者】崎枝

4. マップ作成による検討課題

地図の範囲・用紙サイズ・字の大きさ・完成後の配布先など課題が多く上がりました。次世代の子ども達へ語り継ぐことを目的として、又、このマップが子供達が自ら調べて知る事のきっかけ作りに出来たらと考えました。

その結果、子供達にとって親しみやすさを考えて地図の範囲は、浦添市内の各地域や全学校を入れる事、字も少し大きく・難しい漢字はなるべく、ひらがな使いにする事や沖縄戦を理解するためキーワードを入れる事に決まりました。

5. おわりに

激戦の12日間前田高地（浦添城址）の悲劇

私は、ハクソー・リッジの映画を観て主人公のデズモンド・ドスが断崖をよじ登った場所が浦添城址にあることを知りました。そしてそこが沖縄戦で激戦地の一つであった前田高地であることを知りました。浦添市民は、これらのことを知っているのだろうか、浦添の人に知ってもらうにはどうすればいいのかと思い、卒業制作のテーマとしました。

私たちは、前田高地を研究するにあたって、浦添市史、字誌、沖縄戦新聞、ハクソー・リッジ映画のパンフレットなどを読み、知らないことが沢山ありました。更に体験者の聞き取り調査を行い、生の声を聞くことができました。前田での戦いは1945年4月25日～5月6日の短期間でしたが浦添村民、日本兵、アメリカ兵、多くの死者がでました。浦添村民の犠牲者は実に全住民の50%2人に1人、全世帯の25%4家族に1家族と悲惨なものでした。

そこで私たちは、この悲惨な激戦を伝えるにはどうすればいいかと考えたところ、マップを作って浦添市民へ、特に子供たちに向けて当時の住民の足どりや様子を伝えようと思いました。

卒業制作のための話し合いをしていく中で、マップ制作以外にも、この悲惨な戦争を伝えるための案がいくつか出ました。そのうちの2つを、松本市長へ提案させていただきます。

1つ目は『平和の礎の浦添版』です。

浦添には、個人名が記載された慰霊碑がありません。隣の西原町には立派な西原の塔があり5106名の個人名が記載された慰霊碑があります。浦添には、浦和の塔はありますが、個人名を記載したものではありません。前田高地平和之碑はありますが北海道出身者の兵隊を主に慰霊したもので、日本兵の故人名が全て記載されています。浦添にも西原の塔のような個人名を全員記載した慰霊碑を立てるのは如何でしょうか。浦添市民だけでなく、この地で亡くなった日本兵、アメリカ兵、その他外国人の方も合同で慰霊するのが良いと思います。つまり『平和の礎の浦添版』です。

2つ目は観光資源として更に生かすことです。前田高地(浦添城址)はハクソー・リッジのモデルの地として観光客が増えてきています。ハクソー・リッジの断崖を下から見上げられる場所の設置や、ハナレジーへの道をわかりやすく安全に散策できるルートの整備などの必要性を感じています。更にバスでの観光ルートに組み込みやすいようにすると修学旅行での利用も望めるかと思います。

私たちは、作成したマップを学校、その他関係各所に配布する予定です。学校の平和学習の資料として、戦争の無い社会づくりに利用していただければ幸いです。

6. 参考文献資料

『字誌なかま』

『前田高地の戦闘について』 浦添市教育委員会作成

『私の沖縄戦記・前田高地六十年目の証言』 著者外間守善

『ひろ子ちゃんが体験した沖縄戦争（いくさ）』 知名正男

うらそえ広報 6月号 2017年No.690

浦添市史

沖縄戦新聞 2005年9月15日琉球新報発行

琉球新報 24紙面 2017年10月25日発行

ハクソー・リッジ 映画パンフレット

7. 協力者（順不同）

手登根 広子

玻名城 初江

又吉 武市

石川 仁栄

知名 正男

大田 朗

皆様のご協力とお力添えで、私たちの卒業研究ができました事

大変感謝しております ありがとうございます。



てだこ市民大学



浦添市「てだこ市民大学」事務局

〒901-2501 沖縄県浦添市安波茶1-1-1

浦添市教育委員会教育部生涯学習振興課内

電話 098-876-1234(内線6064)

FAX 098-879-7280

E-mail syogaku@city.urasoe.lg.jp

